
松陽学園生徒の日常

俺様参上！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

松陽学園生徒の日常

【Nコード】

N4628I

【作者名】

俺様参上！

【あらすじ】

松陽高校の生徒4人のありえない日常を書いてく物語です。まあ、普通の話もあるけどね。たまにシリアスになるかも。まあ基本コメディイイです。

1 限目・・・朝の風景

「ふあゝあ」

「いきなりあくびしてんじやねーよ馬鹿正樹ばかましか」

「なんで！？あくびしてなにが悪いの！？」

あいかわらず五月蠅なつむしいやつだ。

どうせあくびの原因もネトゲとかを夜遅くまでやってたんだろ。

「おお、正解」

「勝手に人の心読むんじやねえアホ野郎」

「いや、なにか言うたびに俺を罵倒すんのやめてくんない？それに
お前の心を読んだんじやなくてお前が口に出してただけ」

「それは本当か？嘘だったらぶち殺すぞ？」

「犯罪に対しての罪が重すぎる！あと嘘じゃねーから！」

うくん、声に出してたか…まあ聞かれてもそんな困ると思ってね
ーし、別にいいか。

「ってか次の日が学校なのに遅くまでゲームなんてやってんじやね
えよ」

「いやゝだつてさ、ああいうの辞めらんなくね？」

「知るか。そんなんやつたことねえわ」

「ええゝ！？人生の半分くらい損してんぞお前！？」

「寝言は寝て言いやがれ糞野郎。そんなことで人生の半分も損して
たまるかクズ」

「……………うんわかった。もう言わない(涙)」

うん、なんか泣いてるけど無視するに限る。

ん？なんか声が聞こえんな。なに？俺たちは誰かって？どーでもい
いだろそんなん。

…うっせーな。わあーったよ。言うから少し黙れ！

俺は笹本幸一。松陽（しようよう）高校2年で16歳。

まあ、どこにでもいる高校生だな。

んで隣にるのが俺と同じ学校でクラスメイトの藤倉正樹。

なぜかこいつとは縁があるらしく、小学校の頃からずっと同じクラ
スだ。

あと、さっき言ったとおり馬鹿でアホでクズ。しかもオタク。全く
救いようがねえな。

「なにさっきから一人でブツブツ言ってるんだ？」

「気ニシナ〜イ」

「他作品のキャラのセリフパクんなっ！」

さすが正樹。今日もいいツッコミっぷりだ。

「さて、いいかげん正樹をいじんのも飽きたし行くか」

「おい！」

「ラッキー幸ちゃん！」

「ああ？」

見ると玲奈がものすごい勢いでこっちに向かってきた。
俺はそれをすばらしい反応速度で避けた。

ズザザザア！！

と、同時に玲奈は顔面から地面に着地した。

「いった〜い！なんで避けんのよ！」
「当たり前だ。お前は俺に死ねと言うのか？」
「はあ、全く、素直じゃないんだから」
「お前をぶち殺したいという気持ちに素直になっていいか？」
「すみませんでした」

このやけにテンションが高いのは高崎玲奈。
こいつも正樹と同じ腐れ縁で小学校からずっと同じクラス。
とにかくテンションが高いので一緒にいてかなり疲れる。

「あ、おはようございます。」
「お〜、理緒。おはよう」
「あ、理緒ちゃん。おはよう」
「理緒じゃん。おは〜」

このなんかおとなしそうなのが田中理緒。
理緒も同じクラスだが他の二人と違って腐れ縁ではない。
なんか小動物を連想させるやつで、性格もおとなしい。

「あ、玲奈ちゃんおはよ…ってどうしたのその顔！」
「ああ〜、これはそこで思いつきり転んじまって」
「大丈夫？」
「ああ〜、大丈夫大丈夫。こいつ丈夫だから」
「お前がいうなっ！」

玲奈の回し蹴りが正樹のみぞにきれいに入った。
正樹がうめいてるが無視。

「で、お前ら」
「何だ？」

復活はえーなこいつ。

「時間」

「え？……………えええええええ！？」
うつせーな。

「な、なに？なんなの？」

「こ、これみる！」

正樹の時計を見た二人の顔が青ざめていく。

ただ今の時刻・・・8：25分

ちなみにうちの学校は8：30までに校内に入ってなきゃ遅刻となる。

遅刻した生徒にやあつそろしい罰がまつてるそうな。

「……は、はしれ……！！」「」

「ほいほい」と

まあ俺はいままでに何回か遅刻してるからわかるがそんなキツイ罰でもなかったし、別にいいんだがな。

「やばい！校門が閉まる！」

「急げ〜！」

二人がいままで以上のスピードで走る…が、

「はあ…はあ…」

理緒がすでにばてていた。

まあ見てからに体力なさそうだもんな。

「…しょうがねえな」

俺は理緒を背負うと全力でダッシュした。

「こ、幸一君!？」

「すこししゃべるな。…舌嚙むぞ」

「え?…きゃあっ!」

俺はスピードを自動車に追いつくんじゃないかというくらいまで上げ、

なんとか間に合った。

校門を閉めようとしていた先生が驚いていたが無視。

「あ、ありがとう、幸一君」

「気にすんなって」

なんか理緒の顔がかなり赤かったけど…ま、走ったせいだろうな。
気にしないって

1 限目・・・朝の風景（後書き）

初めまして！俺様参上！でございます。

初めて小説を書いたんで、あまりいい文章ではないですが、大目に
見てやってください。

どうぞ、感想等、なにかありましたら書いてってください。

お願いします！

2 限目・・・危険人物登場（前書き）

改めて読んでみると……本当ひどい文章ですね。

でも、どうが長い目で見てやってください。m（―）（―）m

2 限目・・・危険人物登場

さて、無事に遅刻を免れた俺たちは悠々と廊下を歩いてた。
まあ、他のところは朝のHRが始まってるみたいだがそんなのは気にしない。

「ふう〜、危うく遅刻するところだったぜ」

「まあ、俺は別に遅刻しても構わないんだがな」

実際、一年の時はほとんど毎日遅刻してたからな。
しかし、よくこんなんで進級できたなあ俺。

「おお、遅刻といえば、ようやくあの先生とおさらばなんだよな」

「そうね。あの時は地獄だったわ……。」

「地獄……？」

「ああ、理緒は去年別のクラスだったから知らねえのか」

「まあもうちょっとで教室に着くし、あとで話してあげるわよ」

あの先生つてのは正樹が言ってたとうり一年の時の担任である。
なぜ恐れられてんのかは……そのうち分かんたらろつか説明メンドイ。

そんなこんなで教室まであと少しってとき、なんか変な感じがした。
この感じってあの時の……

「理緒、ちよっときてみ」

俺は三人から少し離れ、理緒を呼んだ。

「何？幸一君？」

「ちょっとここであの二人を見ててみな」

「え？なんで？」

「まあいいから、面白いもんが見れんぜ」

「う、うん……」

― 理緒視点 ―

なんか幸一君があゝの二人を見てるって言ってたけど、どういふことだろう？

それになんか面白いものが見れるって言うけど……。

そんなことを考えてたらあゝの二人が楽しそうに話しながら教室の扉を開けた。

【ドツガアアアアン！！！！】

次の瞬間。その二人が宙を舞っていた。

え？あれ？なんで？なんで二人が浮いてんの？

何が起こったの？

「あーっはっはっはっは！！！！」

なんか幸一君は大爆笑してるし、玲奈ちゃんと正樹君は屍と化してるし、近くになぜか丸太があるし、本当になんなの？この状況。私が混乱していると私たちの教室から美人な女の人が出てきた。なんか先生っぽいけど……誰だろう？

そしてその人は大爆笑してる幸一君を見るとつまらなさそうに

「ちっ、また外したか」

と言った。いえ、当たってますよ？あの二人に。

「どうしてあんたがここにいるんだ？」

爆笑していた幸一君がいつの間にか復活して、先生っぽい人に聞いていた。

「ああ、実はお前たちのクラスの担任である村田先生が入院してな。その間、臨時で私がこのクラスの担任を任せられたんだ」

「へえー、なるほどな。そんじゃまあまたよろしく」

「ああ、よろしくな」

茫然とする私。

あの人本当に先生だったんだ……。

なんか後ろのほうから「あ、悪夢だ……」という声が聞こえてきた。本当に何なんだろうこの状況……。

2 限目・・・危険人物登場（後書き）

ということでも二話目です。

前回に比べて短くなりました。

さて、あの危険な先生の名前は次回分かります。
それでは、また。

3 限目・・・あの先生の名前は

― 理緒視点 ―

「内橋千帆っていうの？あの先生」

「うむ」

へえ、意外にかわいい名前なんだ。

「確かにかわいい名前だが性格は極めて凶暴、趣味は罠を作ること
という

かわいさのかけらもない人だぞ？」

っ！？こ、心を読まれた！？

「いや、口に出してたぞお前」

そ、そうかぁ口に出してただけかぁ。ってそれ結構恥ずかしいこと
してるんじゃないあ…。

「まあ、嘘だな」

「嘘なの！？本当に心を読めるの！？」

「気ニシナイ」

「いや、気にするよ！？」

なんかたくさんツッコまされました。なんだか幸一君は満足した様
子。

そんなこんなしてるうちにあの先生の罠にやられた二人が復活して

ました。

「おい幸一テメエ！！分かったのなら俺らにも教えるよ！！」

「だって教えたら面白くねーじゃん」

「お前だけな！！こっちはなんにも面白くねーよ！！むしろ痛いだけだ！！」

「だろうな」

「分かってんならやるんじゃねえええ！！」

「俺が面白ければ全てよし！！」

「よくねえよ！！迷惑以外の何物でもねーわ！！！！」

「気ニシナイ」

「気にするわボケエ！！そしてパクんのもいいかげんにしやがれこの野郎！！」

正樹君が最後のツッコミをした後、完全に疲れ切っていた。

……御苦労さま。

「そつえばさ、あんたどうして畏が仕掛けられてるって分かったの？」

そう、それは私も知りたかったなんで分かったんだろう。

「ああ、勘」

「「「は？」」」

か、勘って…。

「昔っから俺の勘ってよく当たるんだよなあ」

「「「へ、へえ〜……」」」

二人を見ると何とも言えない顔をしていた。
幸一君って一体何者なんだろうか……

「そういえばなんであの先生と話してる時嬉しそうだったの？この二人は嫌がってたのに」

「ああ、内橋先生ってからかうとおもしろーからな」

なんか…幸一君から黒いオーラみたいのが出てる……。

「それにあんな畏俺が当たるわけねーだろ」

「どれだけ自信たっぷりだ」

「だって実際当たったことねーし」

まあ、予知能力もとい、幸一君の勘があれば避けるなんて簡単なんだろーけど。

「ま、あんなん自分からかかりにいつても余裕だけどな」

「ああ、あつたわね。そんなの」

「確かあん時は……爆弾だったっけ？」

え！？爆弾！？

「うん、あの時はさすがのあんたでも死んだって思ったわね」

「なんせ半径1.5m以内に入ってたもん全部消し飛んだからな」

「どんだけハイスペックな爆弾なの！？」

「ま、お前には全くダメージはなかったけどな」

「普通の人だったら10人は殺せる爆弾だったんだけどねえ」

!!???!?!???

「まあ、鍛えてるからな」

鍛えるとかそついう以前の問題だよ!?

キ~~~~ンコ~~~~ンカ~~~~ンコ~~~~ン…

「おつと、鐘なつたな」

「席に着かなきゃ」

「……………」

―幸一視点―

いやー、理緒の反応面白かったなあ

玲奈と正樹に事前に打ち合わせておいてよかったよかった

しかし、本当に信じるとは思ってなかったなあ。

あの二人でさえ信じなかったのに。

まあ、実際本当なんだけどな。

3 限目・・・あの先生の名前は（後書き）

ということでも話目です。

ぐっただです。こんど時間がある時に直そう……。

それはそうとコロコロさん、何回もパクってすみませんでした

m () m

4 限目・・・カレーパワー

―幸一視点

あゝ、やっぱり春は昼寝するに限るぜ

ジリリリリン！ジリリリリン！

ああ？電話かよ、めんどくせえなあ…居留守使つか。そのうちあきらめんだろ。

ジリリリリン！ジリリリリン！

……………。

ジリリリリン！ジリリリリン！

……………。

ジリリリリン！ジリリリリン！

ブツン

「だあゝ！うざってえ！」

くっそ、俺の昼寝タイムを邪魔しやがって！！

「はいもしもし？」

『あ、幸ちゃん。やっと出た』

「なんだ玲奈かよ。何の用だ？」

どうせくだんねえ用だろうけどな。

『あのさ、お花見行かない？』

「行かない。じゃあな」

『あ、ちよつとま【ガチャン！】』

ふう、無駄な時間を過ごしたぜ。それじゃ、昼寝の続きでも…

ジリリリン！ジリリリン！
できないな。

「何だ？」

『何だ？じゃないわよ！なんでいきなり切るのよ！』

「気分」

『何よ気分って！』

「気分・・・そのときどきの気持ちの具合。心の様子」

『そういうこと聞いてんじやないわよ！』

「まあまあ、落ち着けて。あんまり怒ると太るぞ3キロくらい」

お、やっぱり黙ったな。

『……………なんで知ってんの？』

「さあ？なあんでだろ？ねえ？」

『……………』

くっくっく。やっぱりいつからかうとおもしれ。なあ。

あっち側で顔面蒼白になってる姿が目につかぶぜ。

『あの、ど、どうかそのことは内密に……………』

「どしよっかなあ？」

『か、カレー奢るからな』

「任せろ。俺の口は鉄より堅い」

『変わり身早っ！』

当たり前だ。カレーに勝てる奴なんてこの世に存在しねえ。

『じゃあさ、さっきも言ったとおり、お花見行こうよ！』

「なぜそうなる」

さっきのことを黙ってる約束はしたが、花見に行く約束はしてねえ。

『いや、その帰りに奢ろうかになって』

「よし、いつどこに集合だ？」

『これまた早いね。え〜っと、じゃあ駅前に5時頃に集合ね』

「分かった。ちなみにあいつらも来るのか？」

あいつらとはもちろん理緒と正樹のことだ。

『もちろん!とつくの昔に誘ったわ!』

「りょーかい。ああ、それと金はかなり多めに持ってこいよ」

『?何で?』

「俺はか〜なり食うぞ?」

かなりの部分を強調しておいた。

『……了解』

「そんじゃ後でな」

『うん、じゃあね』

【ガチャン】

ふう、今は昼の1時か。そんじゃ、5時まで運動でもするかな。
めいっばい腹をすかせておかなくちやな

4 限目・・・カレーパワー（後書き）

というわけで4話目です。5話目に続きます。
最近忙しくて話が浮かびません。頑張らないとなあ……。

5 限目・・・お花見というか…

―幸一視点―

遅い…、正樹の奴、遅刻してくるたぁいい度胸じゃねーか。

「遅いねえ、正樹君…」

「あいつ…ぶっ殺す!!」

おうおう、玲奈が物騒なこと言ってるね。

しかし、同感だ！あいつマジでぶっ殺す!!

「お、いたいた。お〜い！遅れてす」「死ねええええ!!」「ぶへらっ!!」

俺と玲奈は正樹の姿を確認した瞬間、正樹の顔面にとび蹴りを喰らわせる。

お〜、よく飛ぶねえ〜。

「いつてーな！いきなりな」「ああん？」「すみませんごめんなさい俺が悪かったです」

俺と玲奈が殺気を含んだ睨みをしたら正樹は速攻で土下座した。

「だ、大丈夫？正樹君」

「ああ、大丈夫。理緒だけだな心配してくれんの」

心配も何も加害者ですけど？俺ら。

「さて、馬鹿のせいであ〜り遅れちゃったし、急ごっか」

「馬鹿って俺のこと」「黙れ」「はいすみませんごめんなさい」

まったく、身の程を知れっつての。

「ふう、やっと着いたか」

駅から10分歩き目的地である桜野神社に着いた。

「ん？今日は縁日か？」

正樹が玲奈に聞く。そういやなんか騒がしいな…。

「そう！実は今日は縁日だったのです！ババーン…！」

「ババーンって口で言うなよ」

「さあ、いざ出陣じゃ」

「いや、戦じゃねーし」

うーん、さすが正樹。今日もいいシッコミしてるぜ。

「しかし、うるせーなあ」

「縁日なんだから仕方ねえだろ」

「いや、あいつらのこと」

女ってやつあどうして縁日「ときであんなにはしゃげるかね。

「カレーでテンションを上げられるお前よりマシだと思っけど」

またこいつ人の心を読みやがった。ツッコミ役にはそんなスキルがあんのか？

「だから、声に出てるっつーの」

「ありま」

また声に出してたか。気をつけなくちゃな。

「おい、早く来なさいよ！」

「ほいほいっ」と

―正樹視点―

ただいま夜の九時。そろそろ縁日にきてる人も少なくなっていた。

「ふう、もうすぐ終わっちゃうね」

「つてか桜見てなくね？」

「幸一、気にしたら負けよ」

どんな理屈だ。

「さてと、そろそろ行くかね」

「家にか？」

「うんにゃ、カレー屋に」

カレー屋？なんで今から？しかもそれを聞いた玲奈がなぜか顔面蒼

白になってるし……。

「ありゃ？もしかしてお前ら聞いてねーの？今日の帰りに玲奈のお
ごりでカレー屋行ってくて」

聞いてねーよ。

しかし、いつも遅刻ばかりしている幸一が珍しくちゃんと来てい
たわけがやっと分かった。

だからカレー屋と聞いて玲奈の顔色が悪くなっただんな。

ま、当然と言っちゃあ当然か。

だが……、

「おい玲奈」

「何よ……」

「俺も半分出してやるよ」

それを聞いた瞬間、玲奈の顔がぱっと明るくなった。

「本当！？」

「ああ、だから早くいーーぜ」

「うん！」

こいつに暗い顔は似合わんからな。

カレー屋

【がつつむしゃむしゃ】

「……………」

どうやら玲奈も俺と同じことを考えついたらしい。
この状況の改善策。それは……

「理緒！頼む！三万ほど貸してくれ！」
「お願い！！！」

完璧な部外者である理緒に土下座して頼みこむことだった。

「ふ、二人ともそんなことしないでよ……お金なら貸してあげるから……」

と、理緒に金を貸してもらった。ありがたい！

「すまない！この金は二人で明日倍にして返す！」

と、俺はさっさと会計を済ませた。ふう、なんとか助かった。
外に出たら玲奈しかいなかった。どうやらあいつらは先に帰ったら
しい。

とりあえず、俺と玲奈はその場で叫んだ。叫びたかったんだ。

「あいつは人間じゃねええええ！！！！！！」と。

5 限目・・・お花見というか…（後書き）

や、やっとできた…。今日はかなり忙しかった…。
疲れすぎて眠い……。
というわけでもう寝ます…。それでは。

6 限目・・・たとえ槍の中隈の中（前書き）

今回、作者が出てきます。

作者はキャラじゃないんですが……まあいいか。

6 限目・・・たとえ槍の中腹の中

―作者視点―

現在地・・・笹本家 現在時刻・・・11時30分（水曜日）

「く〜く〜」

「・・・まだ寝てやがる。おい、早く起きろ〜」

「く〜く〜」

「お前が起きなきゃ話になんねんだよ。さっさと起きろ」

「く〜・・・むにゃ」

「むにゃじゃねーよ。遅刻だぞ〜」

「く〜く〜」

……………プッチン。

「早く起きろやコラ ……！！！！」

思いつきり幸一の頭を殴ってやった。

「……………」

「やっと起きたか。さっさと学校行きやがれ」

「オイテメエ」

どうやら怒ってるらしい。ま、そりゃそうだな。しかし……………

「残念だったな。俺にお前の攻撃はきか……………」

「おらぁっ……………」

「ぐはっ……………」

ってあれ？なんで……

「どりゃあっ！ー！」

「ぐへっ！ー！」

なんで作者である俺が殴られてんの！？

「これでとどめだ！ー！」

「おい、ちよつとま……！」

「くらえ！裂破風神拳！ー！」

【ドツゴオオオン！ー！】

「ぐ、ぐっはあああああ！ー！」

なんで……こんな技使えんだ……こいつ……？

ー幸一視点ー

ふう〜、つたく、作者が小説ん中入ってくんじゃねえよ。

おや？また天の声が聞こえんな。なんで作者を殴れるかって？

それはな、実は俺にも作者権限が与えられてんだよ。

だから作者の野郎と同格なわけ。分かった？ドゥーユーアンダスタ
ン？

さて、今は11時40分か……今から学校いくのもめんどくせえな。
今日はさぼるか……って

「ああああああ！！！！」

やべえ！！俺としたことがこの日を忘れてるなんて！！
急がなければ！！！！

……………幸一が慌ただしく出て行ったあとの部屋。そこにえらく
でかい紙に『5月25日は学食カレーおかわり0円デー』とかいて
あった……………。

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

よし！校門まであと少しだ！ここまでくりや余裕だぜ！
俺は車さえ抜かす勢いで校門を飛び越え着地した瞬間、
なぜか仕掛けられていた落とし穴にはまりそうになった。

「ふっ、やっぱりここからは一筋縄にはいきそうにねえな……………。
けど、ここで立ち止まるわけにはいかねえ！！！！」

俺は校舎に向かって走り出した。途中、落とし穴がさらにあったが
簡単な体重移動（分かりやすく言えば水の上を走る感じ）で全て乗
り切った。

そして、校舎に入った瞬間、四方八方から大量の槍が襲ってきた。
俺はその全てをたたき落とすとした。

「まだまだあ！！！！」

俺はさらに走る。さらにいろんな罠が俺を襲ってきたが全てかわし

た。

「あと1分！」

「まてい！笹本幸一！」

「！内藤…先生…」

そう、今俺の目の前には現在俺たちのクラスの担任である内藤千帆が立っていた。

「そこをどいてください」

「馬鹿め！どけと言われてどくやつはいないわ！！ここを通りたいのなら力づくでどかしてみろ！！」

くっ、仕方ねえ。あんな奴でも一応先生だから殴りたくはないのだが……。ま、いいか。

「なら、手加減はしねえ！！」

「望むところだあつ！！」

「行くぞ！崩襲脚！！」

俺は思いつきり飛び上がり、勢いをつけて蹴り落とした。

威力は普通なら軽く気絶するくらいに落としておいた。

ま、これではらくは動けないだ……

【シュツ！】

「ふん、そんなもんか？」

なるほどね。先生も結構やるもんだ。

「次は私の番だ！くらえっ！！」

先生はかなり速いパンチを連続で出してきた。

けど……

「よ、ほ、はっ」

まだまだだな。普通の人と比べりやかなり強い部類だが、まだ俺にやかなわない。

さた、そろそろ時間もなくなってきたし終わりにするかね。

「悪いな先生、けど、今時間がないんだ」

俺は先生の間をつき、首に手刀を入れた。

「な、なんだと…?」

先生が崩れるように倒れる。やっと気絶したか……。

おっ、やべえ！もう5分も過ぎてやがる！

急げ、俺!!!

なんとかかついたな。いままでいろんな障害はあったが、大したことはなかったな。

「おばちゃん！カレーくれカレー!!」

「ああ、幸ちゃん。残念だったね。ついさっき売り切れたよ」

「はあ!？」

「実はさっき一人で全部食べちゃった人がいてさあ。その人なんかカレーが消えるように食べててさ。大変だったよ」

俺は啞然とした。俺以外にそんな奴いんのか？

いや、まで。さつき消えるようになって言ったよな。もしや……

「なあ、おばちゃん。そいつの特徴教えてくんね？」

「えーっと、眼鏡をかけてて、背が高くて、黒髪の長髪だったよ。」

なるほど。決まりだな。

「ありがとう、おばちゃん。おかげで助かったよ」

「ああ、どういたしまして」

あいつ……ぶつ殺す……！！

ー作者視点ー

ふう、疲れたあ。

変装もなかなか楽しくないぜ。

しかし、幸一の奴悔しがつてるだろうなあ。

食堂のカレー全部食われたって聞いてさ。

まったく、さつきあんなことしなけりゃカレー食べたのに。

さて、当分カレーには困りそうもないし、昼飯でも食うか。

【ガッシャーン……！】

「な、なんだ!？」

「やっと見つけたぜえ？作者さんよお」

「こ、こ、こ、幸一……!?ど、どうしてここが分かった!？」

「勘」

いや、勘って……。

「さあて、死ぬ覚悟は出来てんだろーなあ？」

「まままで！カレーならある！まだ一口も手をつけてない！これを渡すから命ばかりはなにとぞ……」

「そうか、まだ一口も手をつけてないのか。それじゃ……」

ほっ、よかった。物分かりのいいやつで。

「半殺しで勘弁してやるか」

つてええええええ！！？半殺し！？

「ちよっ、助けてくれるんじゃない？」

「命だけな」

「ほんとに命だけかよ！つてちよつとま……」

「問答無用！！」

「ぎゃあああああ……！！……」

「そんじゃあな」

幸一が幸せそうに帰った後、作者の家にはカレーの残骸とかがろっじで死体になってない作者が残された……。

6 限目・・・たとえ槍の中農の中（後書き）

ということで第6話でした。

今回は、幸一が普通の人間が使えない技を使いましたが、それについての話はいつか書きます。

ということでは技解説。

崩襲脚・・・某RPGの特技。そのまんまなので書くことは特にな
い。

裂破風神拳・・・大量の真空刃をだし、隙を作ってから相手に風の
力をつけた拳でぶっ飛ばす技。かなり吹っ飛ばす。

7 限目・・・やっぱりお年頃

―玲奈視点―

えっ？あたし視点？まじ？

やりい！始めてじゃん！

つと、まあそれは置いといて……

「ねえ理緒」

「なあに？玲奈ちゃん」

「あんたさ……好きな人いる？」

「えっ……えええっ！？／／／／」

「あんた声大きい」

言っでなかったけど今は授業中なのだ。ま、先生はもう歳で耳が遠いからみんな話してんだけど。

「で？いるの？」

「い……いるにはいるけど……」

やっぱりね。となると、相手はやっぱりあいつか。今はまだ来てないけど。

「あんたってホント分かりやすいわね」

「れ、玲奈ちゃんだって、好きな人いるんじゃないの？」

「あ、あたし！？／／／／」

「うん、玲奈ちゃん」

「あたしも……一応いるにはいるけど……／／／／」

「そ、そっか……」

「ど、どうしたの？いきなり暗い顔をして」

「もしかして玲奈ちゃんの好きな人って………ううん、なんでも
ない」

はっはっん、なるほど。そういうことね。

「安心しな。幸ちゃんじゃないよ」

「ほ、本当!？」

「うん、だから落ち着きなっつて」

まったく、いちいち授業中に立つちゃだめだつて。

「あれ?なんで私の好きな人知ってるの?」

「あんた見てりゃ誰だつて分かるわよ」

「ええっ!!!」

「だつてさ、あんたいつも幸ちゃんのほう見てるじゃない。あれで
分かんないのはかなりの鈍感だけよ。幸ちゃんみたいなの」

「むう、幸一君を馬鹿にしないでよ」

「はいはい、ごめんなさいね」

「もう……あ、そういえばさ、玲奈ちゃんの好きな人って誰なの?」

「え?えっつと……」

「ごまかさないですよ」

ちよつと!ここで普通タイミング良くチャイムが鳴ったりするんじ
やないの!?

どうなのよ!作者!

神の声『鳴りません』

「さあ玲奈ちゃん?白状しなさい!」

「わ、分かつたわよ……」

ふう、もうあきらめた。だってこういつときの理緒は絶対引かないもの。

「で？誰なの？」

「えつとね……………正樹」

「え？正樹君？」

なぜか理緒は意外そうな顔をした。

「なんで？」

「なんでって……………だって、優しいし、かっこいいし……………」

「ふうん」

「な、何よ」

「だって、玲奈ちゃんいつも幸一君に抱きつこうとしてたからどうなのかって」

「ああ、あれね。あれは……………照れ隠しよ……………」

「え？」

「だ、だって…好きな人に抱きつくなんて……………恥ずかしくて出来ないもん……………」

く〜！！なんで私こんな恥ずかしいこと言ってるわけ！？……………

「そっかあ、好きな人に触られるだけでも恥ずかしいのにな〜」

「そ、そうなのよ!」

分かってるじゃない、理緒!

【キーンコンカーンコーン】

「あ、授業終わった」

「それじゃ一回席に戻るわね」

「うん、それじゃ」

―理緒視点―

そっかあ、玲奈ちゃん正樹君が好きなんだ。よかった、幸一君じゃなくて。

って、そうじゃなくて！

実は私、正樹君から相談というかお願いされたんだよね。

「玲奈の好きな人を聞いてきてくれないか／＼／＼／＼」

ってね。ま、深くは聞かなかったけど、顔真っ赤にしながらいわれて
って断れないじゃん。

さてと、あの二人がどうやったら二人がつきあえるか考えないとな。

あと……私と幸一君の関係も／＼／＼／

っ！これ！これはなし！／＼／＼／

7 限目・・・やっぱりお年頃（後書き）

すいません、昨日は少し用があつたので更新できませんでした。

それと眠くていろいろおかしいところが多数……すいません……（

涙）

相変わらず今もご意見感想を出せる人期待しています。

まじでよろしくお願いします！

8 限目・・・計画中・・・(前書き)

前回、間違えてはいけないところを間違えてました！

もう直しましたが・・・すでに見てしまった人、本当にすみませんでした！

次回からはこんなことが無いようにしたいです。

8 限目・・・計画中・・・

「幸一視点」

「ん…っ」と

んん、もう朝か。って言ってももう11時だけだな。

さて、何しようかな。……んん、何にもすることがない。二度寝するにしても今は眠くねえし……。仕方ない、学校にでも行くか。

というわけで学校。今は教室の前。

今日は金曜か…この時間帯って確か……

【ガラッ】

【シュシュシュ】

やっぱりかい。

「よっ、ほっ、はっ」と

「ちっ！またはずしたか！」

「いや、当たったら死ぬでしょう」

正樹が俺の代わりにツッコむ。が、しかーし！そのツッコミは間違っている！

だって……

「俺は当たっても死なねえよ？」

「そこは死んどけよ！人として！」

死んどけって…こいつは俺のことが嫌いなのか？

「おい、笹本。今日は何で遅れた」

「寝てました」

先生の問いに間髪入れずに答える俺。

「そうか……………死ねえ!!」

そして俺に殴りかかろうとする先生。まったく、ワンパターンなんだよな。

「よつと、旋風弾！」

攻撃を避け、追撃を入れた。

「ぐはっ!!」

【ドッガン】

あ、やべ、力の加減間違えた。

先生外まで吹っ飛んじまった。まあ、あの先生なら大丈夫だろ。

去年うちのクラスだった奴は落ち着いてるが違うクラスの奴は焦ってたな。

ま、気ニシナイってことで。

「ねえ、幸一君」

「んあ？なんじゃいな、理緒」

「実は…ちよつと、相談したいことがあって……」

おお、俺が相談受けるなんて珍しい。

「ああ、別にいいぞ？」

「ありがと。それじゃ、ここじゃあ、あれだから一緒に屋上行くよ」

「そうだな。そんじゃ行くか」

屋上

おお、いい風だ。なんかまた眠くなってきちまった。

「それでね、幸一君」

「んあ？」

「えっと、相談したいことなんだけど……」

「おお、そうだったそうだった。…それで？」

「あ、うん、……正樹君と玲奈ちゃんのことなんだけど……」

あいつらの？

「あいつらがどうかしたのか？」

「うん……実はさ、あの二人、両想いなんだよ」

は？

「でもね……」

「ち、ちよつとまで。話が急すぎて分からん」

「あ、ごごめん。いま説明するよ」

〈説明中〉

おお、これって楽だな。

「……ってことなんだけど……分かった？」

「ああ、つまり、なかなか素直になれない二人をくつつけるために俺に助けてほしいと」

「う、うん。そういうこと」

「どうしようかな。正直、メンドイし」

それに、なんであいつらのために動かなきゃいけないんだ。

「そ、そんなこと言わないで、お願い！！」

なっ！？

「わ、分かったよ／＼／＼」

う、上目使いは反則だろう……。顔、赤くなってねーよな！？

「幸一君？顔、赤いよ？」

なっってたよ……。

「き、気にすんな。俺が暑がりなだけだ」

「そっか。分かった」

ふう、あぶねーあぶねー、なんとかごまかせたぜ。
しかし、……なんなんだ？この胸の高鳴りは……。

8 限目・・・計画中…（後書き）

というわけで第8話です。

なんだか幸一が理緒を気にしてますが、この二人がくつつくのはまだ結構先です。いろいろ考えてるのですがなかなかまとまらなくて

……。

さて、今回も新しい技がでましたので、解説です。

旋風弾・・・手のひらに気で風を集め、高圧縮した球を相手にぶつける技。

かなり吹っ飛ばすため、めんどくさい相手の時に便利。

9 限目・・・遊園地にて…（前書き）

今回は恋愛物っぽいです。かなりおかしいと思うけど許してください……（涙）

9 限目・・・遊園地にて...

―正樹視点―

あいつ……自分から誘っておいて遅刻してんじゃねえよ！
前に俺が遅刻した時は玲奈と一緒にとび蹴り入れたくせに……。
あいつがきたときに絶対とび蹴り入れてやる！

「お〜い、遅れ「死ねええ！！」「よつと」

なっ！？

【ドンガラガツシャーン！！】

うわっ！きつたねえ！ゴミ捨て場につっこんじまった！

「あーはっはっはっは！！！！！！！！」

「な、なにしてんのよ正樹！」

「だ、大丈夫！？」

おお、理緒はいつものごとく優しいが、玲奈が珍しく俺のことを心配してくれてる！

かなり嬉しいなこれ！

それに比べてあいつは……まだ笑ってやがる。そのまま笑い死んでしまえ！！

「もう！幸一君！いつまでも笑ってないでよ！」

「はー、はー、おお、すまん。じゃ行くか」

ったく、あいつはいつもいつも……

「正樹？なにしてんの？置いてかれるよ？」

「えっ？ああっ……！」

「まったく……、さ、早く行くわよ！」

なっ……！／／／／

れ、玲奈が俺の手を引いてる……／／／／
はっ！か、顔赤くなってねーよな！？

「よし、遊園地に着いたぞ」

「ってあれ！？ワープした!？」

「ああ、いろいろな都合上のためワープさせたんだと」

作者………なんとということ………。

なんか玲奈も残念そうだったけど………まさかな。

「さて、何乗るかあ」

「もちろん、ジェットコースターよ!!！」

え!？俺、ジェットコースター苦手なんだけど………

「ふっ、お譲ちゃん、あんた、寿司はウニから食っね？」

「あたりきよっ！あたしは根っからの江戸っ子でい！」

な、なんか幸一まで乗り気だし………。

「ええ〜、や、やめようよ、怖いよ」

おお！いいぞ理緒！頑張れ！

「そんなこと言わないでさ、なあ正樹」
「え!？」

そこで俺に振るか!？

「みんなで乗ったほうが楽しいもんね！」

うっ！玲奈…なんて輝いた目なんだ……

「そ、そうだな」

ああ〜！俺の馬鹿野郎〜！

「それじゃいこーぜ！」

「楽しみ〜」

「こ、怖いよ〜」

「なんてことだ……」

「ああ〜、楽しかった！」

「そうだな！」

どこがだ……ものすごく怖かった……

「思ったより怖くなかったよ〜」

理緒〜！そこで俺を裏切るなよ！

「さて、次はどこ行くか」

絶叫系だけは避けて な……

「お化け屋敷！」

「「「え？」「」」

「どうしたの？」

「いや、お前の口からそんな言葉が出るとは思わなくて……」
「だってこの遊園地のお化け屋敷って日本一怖いらしいんだよ！
？行きたくないのは当然じゃない！」

… 理緒ってこんなキャラだったけ……？

「さあ！行くと決まったらさっさと行く！」

いや、まだ決まっていらないけど……

しかし、反抗したら恐ろしい目に遭いそうだ……

「なあ玲奈」

「……………」

「玲奈？」

「えっ？」

「どうかしたのか？」

「な、なにが？」

おかしいな、いつもの玲奈らしくない。……もしかして。

「お前……お化け屋敷、苦手だろ」

玲奈が体をびくっとさせる。やっぱりかい。

「そ、そんなことないわよ?」
「まったく、無理すんなって」
「ち、違っつて言ってるじゃない!」

はあ…まったく、こいつは……。

「おい、幸一」
「なんだよ?」

「ちよつとさ、別行動にしねーか?」

「はあ?何だよ……」

(幸一君!!)

(あ、ああ、悪い)

「なんだ?」

「ああ、なんでもない」

???変な奴……

「そんじゃ、俺と理緒はお化け屋敷に行くから、あとでここに集合
な」

「ああ、分かった」

「さて、行くか」

「……ありがとう」

「気にすんなって。それよりどこ行くか」

「えっと……観覧車行かない?」

「観覧車か。いいぜ。行くか」

―玲奈視点―

「お〜！たっかいなあ！さすがは日本一の観覧車だな！」

「そ、そうだね」

「しかし、この遊園地日本一のもんが多いよな！観覧車とかお化け屋敷とか」

「そ、そうだね」

うう、恥ずかしくて同じことしか言えなくなっちゃたよ……

正樹だつて困ってるし……うう……

でも、考えてても仕方ないね。よし、告白しよう。いつまでも同じ位置で満足してちゃだめだ。

「ねえま……」

「なあ玲奈」

「は、はいっ!？」

うわあ！き、急に声掛けられたからびっくりして変な声出しちゃった！

「ど、どうした!？」

「な、なんでもない」

「そ、そうか……あのさ、お前好きな人いるか？」

「ええっ!？な、なんで!？」

「いや、ちよつと気になつてな」

な、なんてこと聞くのよ。覚悟なしで言えるわけないじゃない！

「そ、そついう正樹はどうなのよ」

つておい！あたしの口！なんてこと言うのよ！自分がショック受け

るだけじゃない！

「お、俺か？俺は……」

はあ、どうせ理緒みたいな優しい子なんだろうな。まったく、自分で自分の首絞めるなんて馬鹿以外のなにものでもないわね。

「……………が好きだ」

「えっ？」

しまった。聞き逃してしまった。

「ごめん、もう一回言ってくれろ？」

「はあ！？聞いてなかったのかよ！？」

「う、ごめん……」

「いいか、ちゃんと聞いとけよ？……………俺は、藤倉玲奈、お前が好きだ」

……………え？

「だから俺と付き合ってほしい」

「……………本当に？」

「こ、こんなこと嘘で言えるかよ。で？へ、返事は？」

「……………もちろん、オッケーよ！」

―幸一視点―

「あいつら、ちゃんと覚えてるかねえ？」

「大丈夫だよ。あのお二人なら言えるって」

「ま、そうだといいいんだがな」

「それじゃ、もう一回入ろう！」

「また入るんかい。もう10回目だぞ？」

「楽しいものは何回やっても楽しいんだよ！幸一君！」
「はいはい」

ま、いいか。それじゃ、あとで結果を聞くかね。

9 限目・・・遊園地にて…（後書き）

…あれ？なんか正樹のぼうが主人公ぽくね？まあそういう風に書いたんだけど。

ということ二人は付き合うことになりました。

こういうのって書くの疲れるなあ……。

そういうわけで（どういうわけで？）感想など、書いていただけたらなあと思います。それでは。

10 限目・・・第一回登場人物紹介

作「今回は本編から少し離れて登場人物紹介です」

幸「何で今更やんだよ」

作「なんとなく?」

正「聞くな」

玲「それで?どんなこと紹介するの?」

作「ん」と、お前らの性格とか特徴とか色々だ」

理「でも、それやって喜ぶ人とかいるの?」

作「知らん!そもそもこの企画俺がやりたいだけだったし」

正「そんな裏事情話さんでもいいわ!」

作「さて、ということでは...始まるぞますよ」 主犯

幸「いくでがんす」 共犯

理「ふ、ふんがー!」 知らないのにやらされてる

玲「ま、まともに始めなさいよ!」 上に同じ

正「パクんじゃねー!!」 ハブられた

笹本 幸一（16歳）

顔 上の下

外見 軽い天然パーマで暗い茶髪 黒目

性格 基本マイペース

趣味 情報収集

誕生日 12月16日

好きな物 カレーライス（ビーフカレーが特に）

嫌いな物 特になし

特徴

かなりの毒舌&ドS。趣味の情報収集はかなりのもので松陽学園生徒全員と、教職員全員の弱みを握っていて、恐れられている。カレーのこととなるとかなり豹変する。現在一人暮らしである。なぜか戦闘能力があり、その力は世界最強。（一人暮らしと戦闘能力についてはそのうち明かされる）

他キャラの評価

正「理不尽すぎる！」

玲「時々いいやつよ。本当に時々だけどね……」

理「すごかつこよくて、優しく、強いです！！」

藤倉 正樹（16歳）

顔 上の中

外見 肩まである長髪の黒髪いつも後ろで縛っている 黒目

性格 結構冷静……かも

趣味 ネットゲーム

誕生日 10月5日

好きな物 ラーメン（豚骨ラーメンが特に）

嫌いな物 ゴーヤ

特徴

この小説のツッコミ役。オタクではあるが、その事実はこの3人しか知らないの、かなり顔がいいのと運動神経が抜群なのでかなりもてる。家は結構な金持ちらしく、財布の中はいつもリッチ。もちろん人間離れした能力はない。玲奈の彼氏。

他キャラ評価

幸「いいツッコミ役」

玲「ものっすごかつこよくてかわいくて優しくて……（強制終了）」

理「誰にでも優しくいい人です」

高崎 玲奈（16歳）

顔 上の中

外見 腰まであるロングヘアに明るい茶髪 茶目

性格 お調子者

趣味 素振り（竹刀を）

誕生日 8月19日

好きな物 ケーキ（チョコレートケーキが特に）

嫌いな物 ピーマン、ゴーヤ等々、苦いもの

特徴

ツツコミとボケをこなす万能タイプ。人懐っこいため、みんなに好かれていいる。実家が剣道の道場で小さいころからやっていたため剣道はかなり強い。運動神経は高いが成績面はかなりヤバい様子。恥ずかしくなると同じ事しか話せなくなる。

他のキャラの評価

幸「ただの馬鹿」

正「かなりかわいいぞ？反応とか性格とか色々な」

理「ものすごくかわいいよ！正樹君のことになるとすごく顔を赤くするんだよ！」

田中 理緒（16歳）

顔 上の上

外見 肩より少し長いショートヘアで黒髪 茶目

性格 かなり大人しい

趣味 読書

誕生日 3月6日

好きな物 シュークリーム

嫌いな物 ピーマン、キムチ等々（辛いものと苦いものが苦手）
特徴

いつも大人しく、優しい性格のため、男女問わず好かれている。運動神経はかなり悪い。成績面はかなりよく、いつも上位陣に入っている。お化け屋敷のこととなるとかなり豹変する。幸一のが好きらしい。

他のキャラの評価

幸「馬鹿二人と違ってまともな奴……でもねえな」

正「かなりいい子。結構みんなに好かれてるのが意外だったけど」

玲「あたしの一番の親友！反応がかわいしくていいいい子でね」

作「今回は色々な都合上ここまでです。たぶん、第2回があるので他キャラはその時に……」

幸「まだ作ってねえだけだろ」

作「そ、そんなことないやい！」

正「どうだか」

玲「信じられないわね」

作「お、お前らまで……」

理「作者さん……」

作「あ、理緒！お前は信じてくれるよな！？」

理「はい！だから早く作ってあげてくださいね！」

作「信じてねー……！！」

幸「ということ、キャラの設定とかこの世界についてとか疑問があつたら感想等に送れ」

正「バカ！送ってください、だろ……！」

玲・理「待つてまーす」「」

作「しくしくしく(泣き崩れ中)」「」

幸「さて、仕事も終わったことだしカレーでも食いに行くか。作者の金で」

作「なんで!?!」

正「おっ!それいいな!」

作「えっ!?!ちよっ」

玲「行こう行こう!」

作「俺はまだ……」

理「それじゃ、お願いします。作者さん」

作「俺は奢るなんて言ってねー!……!……!」

10 限目・・・第一回登場人物紹介（後書き）

うう、幸一たちひどい……。

ま、そんな風に書いたのは俺なんだけど。あ、でもこんな風に書いてるからってマゾってわけじゃないよ！ホントだからね！信じてよ！？（切実）

ちなみに、最後の理緒のところで変なところがたくさんあったので書き直しました。すいません。

11 限目・・・新登場人物(?) 登場! その1

「幸一視点」

「おい幸一、菓子どこだ?」

「台所の棚の上だ」

「幸一君、お茶入れていい?」

「ああ、頼む」

「幸ちゃん、お休み」

「お前も働け」

俺は玲奈の腹を思いつき踏みつぶす。

「ぶきゅ!」

なんか変な声が出たけど、無視。

「おい幸一! 人の彼女に何してんだ!」

正樹が俺の首元をつかむ。うざい。

「じゃ、お前も踏んでやる」

「ぶへ!」

これまた変な声が出たけど、無視。

「幸ちゃんごめん! 私が悪かった! だからそれ以上力入れないで折れる!」

「すまん! もう口応えしないからこの足どけてくれえ!」

そろそろマジで死にそうなので足をどかす。

「はあ、はあ、川の向こうで死んだひいばあちゃんが手振ってた……」

「あたしも死んだ犬がこっちに向かって吠えてたわ……」

おお、そんなところまで行ってたか。危ない危ない。

「けど、ごめんね幸一君。急におしかけちゃって……」

「気にすんな。それに悪いのは理緒じゃなくてそこで転がってる馬鹿だからな」

「ちよつと！馬鹿ってあたしのこと!?!」

まったく、人ん家だつてのにうるさくしやがって……。

「無視すんな〜!!!」

「五月蠅い」

「へぶつ!」

「おい!て「黙れ」ぐへつ!」

まったく、害虫退治も大変だぜ。

さて、もう気づいてると思うがこの3人は今俺ん家にいるのだ。なぜかというのを説明すると長くなるからあえて説明するとだ、少し時を遡ることになる。

昼休み

「ふう〜、やっと昼休みか。さて、カレー食いに行くか」

「ちよつと待って幸ちゃん!」

「なんだ玲奈。俺は急いでんだから早くしろ」

「実はきよ「断る」ってまだ言っていないじゃない!」

なんだようるせーなあ。

「早く言いやがれこの馬鹿が。その口そぎ落とすぞ」

「怖っ!なんでぞ」「早くしろ」「はい!」

まったくこいつは……。

「実は今日幸ちゃん家行くことになら」

「腐れ」

何で決定系なんだよ。せめて疑問形にしやがれ。

「それはいいってことでいいのかな?」

「いや、それは誰がどう聞いてもダメってことだろ」

なぜか正樹がツツコム。普通そこは俺がツツコムとこじゃね?ってか正樹いたんだ。

「それじゃあな」

「あつ、待ってよ!どうしてもダメ?」

「ああ……ってかなんでそんなに家に来たいんだよ?今までに何回か来たことあったじゃねーか」

「いや、実は理緒があんたっ家行ったことないって聞いたからさ」

「そっぴやそだな」

「だから今日理緒を連れて行くこうかな?って」

「意味分からん」

説明が足りなさすぎだボケ。

「それは気にしないでして、「気にするわボケ」理緒にはもう行くこと決定したって言っちゃたから。」

「はあ!?!」

「どうする?理緒に『実はダメでした』って言ってがっかりさせちゃうの?」

「……………ちつ、分かったよ」

「やった〜!あたしの粘り勝ち!」

「玲奈、今は脅迫というんだ」

「細かいことは気にしない!」

まったくもって細かくねえ……………。

というわけだ。ま、当然そのあと玲奈に鉄拳制裁を与えたがな。

「よし、幸ちゃんゲームしよ!ゲーム!」

「なにがよしだ。それに人ん家のもん探ってんじゃねーよボケが」

「まあまあ、いいからいいから」

「よくねーよこのボケカス。一回死んで人生やり直しやがれ」

「うわ〜ん!正樹〜!幸ちゃんがいじめる〜!」

「おいこら!人のかの「うっせーんだよボケが。何回も同じようなこと言ってるじゃねーよタコが。お前脳みそ腐ってるだろ」

「すいません俺が悪かったです生まれきてごめんなさい」

ふう、この二人いじってたらストレス発散出来たな。

「「おい!?!」」

おや？声に出たようだ。気をつけなくちゃな。H A H A H A H A
H A。

さて、そんなこんなでもう夜。

「お前ら……いつまでいるつもりだ？いいかげん帰りやがれ」

「え？今日泊まるけど？」

「はああああああ！？」 「ええええええええええ！？」

理緒も驚いていた。どうやら知らなかったらしい……ってそんなことあどーでもいい！

「そんなこと聞いてないぞ！」

「そうよ！第一お泊りするってお母さんに言っていないよ！？」

「だって言っていないもん。それに理緒だって今言えればいいじゃない」

「……よし、こいつ殺すか」

「ひいひい！」

俺の言葉を聞いた玲奈が部屋の隅で縮こまる。

「やだなあ、冗談だって」

「あんたの冗談は冗談に聞こえないのよ！」

そりゃそうだ。だって……「冗談じゃなかったからな

【ピンポン】

ん？誰か来た。

「すみませーん、ここ、笹本さんのお宅でしょうか」

「はい、そうですけど」

「よかった。届けものです」

届けもの？誰だろう？

「ありがとうございます」

「ふう、さて何だろうな」

「チヨコとか！」

「こんなにかい箱にいれるかよ」

「まあ、開けてみたら？」

「そうだな」

【ビリビリビリッ】

「ん？手紙？」

「誰から？」

「……………お前のじいさんからだ。……………なになに？」お前に会いた

がっていたから送った』だってさ」

「……………それだけ？」

「それだけ」

じいさんホントあいかわらずだな。しかし、俺に会いたがっていたって……………もしかして。

【ガサガサガサッ】

「……………うわああああ……………」

中には真剣が入っていた。これは俗にいうサーベルだな。けど、他のサーベルと違って真っ直ぐな刀身で、柄にはでかいレンズみたいのがはめ込まれている。

「あ、あれ？でも手紙には確か『会いたがっていた』って書いてあったよね？」

「……剣じゃん」

「……剣だね」

三人が俺を見る。けど、教えてやらない。めんどくさいし、それにこういうのは説明するより自分で確かめるほうが早いだろ。

「よお久しぶりだな、フィナ」

『ああ、会いたかったぞ幸一』

瞬間、場の空気が凍る。が、すぐにぶち破られた。

「「「………け、剣が喋った~~~~!!!!????」「「

ま、そりゃ驚くわな。………けど、驚きすぎじゃね？

11 限目・・・新登場人物(?) 登場! その1 (後書き)

ということでも新登場人物ならぬ新登場剣でした!

もちろんモチーフはTODのソーディアンですが、形等はまったく似せるつもりはありません。ただ、ちゃんと魔法は使えるようになります。

けど、あんまり使うことないんだよなあ……。ま、そのうち考えますが。

もちろん次回に続きます。それでは。

12 限目・・・新登場人物(?) 登場! その2 (前書き)

前回より更新が遅れてすいません! レポートやら大会やらで忙しくて更新出来ませんでした。今回はいつもよりすこ〜しだけ長めかな? ではございぞ。

12 限目・・・新登場人物(?) 登場! その2

― 正樹視点 ―

「それにしても何年ぶりだっけな」

『もう10年くらいにはなるな』

「そうか、もうそんなにたつのか。時がたつのは早いな」

「」「」

「ん?なに黙ってたんだお前ら」

いや、ってかさあ、

「お前何で普通に剣と話してんの?」

「え?なんかおかしいか?」

「おかしいにもほどがあるだろ。剣と人が話してんだぞ?」

「そうか?ちっさい時から話してるからなあ」

「第一、なんで剣が喋ってたんだよ」

『なんだ?剣が喋ったらいけないのか?』

「いや、そういうわけでもないが……」

「じゃ、いいじゃん」

むぐぐ……こいつら……

「でも、どうして剣に人格があるの?」

おおー!いいぞ理緒!

「あ、それ俺も知らなかった。なんでだ?」

ってお前も知らなかったのかよ!

『え〜と、それはだな……………分らん』

「……………はあ?」「……………」

『だ、だって仕方がないだろう!始めて気づいた時は幸一に握られてたんだから!』

「それはますますどういうことだ?」

さらに分かんなくなつたぞ、おい。
そこで幸一がポンと手をたたく。

「ああ、あん時のことか」

「そのあん時を説明しろよ」

「えええ〜」

「うるさい、早くしろ」

「ちえつ」

まったく、あいつは子供かよ。

「え〜とだな、あれは俺が4、5歳の時だな。フィナを送ってきたじいさんの家に遊びに行つていたんだ。その時に森で遊んでたらいきなり目の前になにか光るものがあつてな。それに触つてみたんだ。そしたらなんか剣になつたんだ。それがフィナなんだよ。分かつたか?」

「……………」「……………」「……………」

……………え〜と……………

「ん?どうしたんだお前ら?」

「ううん、なんでもない。ちょっと話についていけなくなつちやつただけ……………」

同感だ。どんだけファンタジーになってくんだよこの小説……。

『私は…そんな風に生まれたのか？』

「さあな。本当にその時にお前が出来たのか分かんが、たぶんそうだと思うぞ。ま、そんなのいくら考えても分かるわけねえし考えるだけ無駄だ」

『それはそうなのだが……』

「んじゃ、この話は終わりってことで」

「強引だなお前」

「気ニシナイ」

「久々にパクんじゃねえ!!」

まったく、作者が怒られるだろうが……。

「でもさあ、明日学校だよな」

「何だいきなり」

「一応聞いとくけどそれ、持っていかないよね？」

「持ってくぞ」

「そっか、いくら幸ちゃんでもそのくらいの常識はあったか……って持ってくるの!？」

「ああ、こいつさみしがり屋だからな」

『私はさみしがり屋などではない!』

「はいはい」

つておいおいおい。

「ちょっと待ちやがれテメエ」

「なんだよ？殺してほしいのか？」

「そんなんじゃねえわ!じゃなくて、お前犯罪者になりたいのか!

？世の中には銃刀法違反というのがあるんだ！日本の警察なめん
よ！！ナイフ持ってるだけで逮捕だぞ！！」

「ああ？ごちゃごちゃうつせーな。少し黙れ」

「ごぶっ！」

「でも本当にどうするの？そのままじゃ確実に逮捕だよ？」

「それについては大丈夫だ。フィナ」

『あれだな？よし、少し待て』

うつ、幸一め、人が親切で言ってやってんのに……ってあれ？なん
かフィナどんどん縮んでつてないか？つて縮んでるよあれ！どうな
つてんだ！？

『どうだ？これでいいだろう』

そういうフィナの体（というか剣）はキーホルダーくらいにまで縮
んでいた。

「おい、理緒。これじゃだめか？」

「……………え？あ、ああうん、そうだね。いいと思うよ」

……………もうなんでもありか……………。

「さてお前ら」

「なんだよ」

「唐突だがさっさと帰れ」

「唐突すぎるほど唐突だな」

「うるさい。もう10時過ぎだ。親が心配すんだろ」

もう10時か。早いな。

「え？でもさつき泊まるって……」
「黙れ。俺はそんなの認めてねえ」

やっぱりか。ま、こればかりはしょうがないか。

「玲奈、帰るぞ。仕度しろ」

「え〜っ、帰るのお？」

「仕方ないだろ」

「ぶ〜」

やべ、かわいい。抱きついてしまいそうだ。
ってそうそう、忘れるところだった。

「おい幸一、お前理緒送っていけ」

「はあ？なんでお「まあ聞けって」……なんだよ」

「いいか？さつきお前が言ったとおり今は夜の10時すぎだ。こんな時間に女の子が一人で歩いてみる。……どうなる？」

「……………やばいな」

「そうだろ？だから、俺は玲奈を送っていくからお前は理緒を送っていけ」

「……………分かったよ」

「それにいいチャンスじゃねえか。お前理緒のことが好きなんだろ？」

「なっ！何言っただテメエ！日本海に沈めるぞ！」

ありやま、顔真っ赤っか。ちょっとした冗談だったんだが……ひよっとしてマジか？

「そうかそうか。大丈夫。俺は応援してるぞ」

「だから違っって……」

「安心しろ。全部分かってるから」
「人の話を聞け〜!!」

ふっ、最近いじられっぱなしだったからな。久々にいじりまくってやるぜ!

注、神の声(彼が幸一をいじるのは初めてです。この間違いは彼が馬鹿なためです。ご了承ください)

っておい!なにさりげに人のこと馬鹿にしてんだよ!

(気ニシナイ)

作者のあんたが使っちゃダメだろ!

「なに独り言言ってるのよ。仕度できたわよ?」

「そ、そうか、今行く」

「おい!まだ話は終わってねえぞ!!」

「じゃ、俺たちは帰るからちゃんと送ってってやれよな」

「おい!テメエ!待ちやがれ!」

幸一が後ろでわめくが無視。うっん、これ気持ちいいなあ。

「待ってって……」

よし、靴もはけたし行くか。

「言ってるんだろおおお!!!!」

【バキヤ!!!!!!】

「ぐはぁっ……!!」

【ドゴーン……!!】

あ、あれ？俺、空飛んでる……？じゃない！落ちてる！

「うわぁぁ……」

【ドサツ！】

「………いってーな!!いきなり何しやがる!死ぬかと思ったじやねーか!」

「うるせえ!お前が無視するからだろ!!」

「だからつとび蹴りすることねえだろ!!」

「黙れ!早くこっち来い!話をつけてやる!!」

「ヘン!嫌なこった!じゃーな!!」

「あつ!ちよつと正樹!置いてかないでよ!!」

「テメ コノヤロー!!明日覚えておけよ!!」

「ちよつと正樹!なんであんな喧嘩してたのよ!」

「ん?喧嘩じゃねえよ?俺があいつの好きな人を知っただけだ」

「そうなの?じゃあなんであんなふうになるのよ?」

「それはあいつが恥ずかしさのあまりあなっただけだ」

少しひどすぎだがな。どんだけ恥ずかしがり屋だよ。

「ふん、じゃあ幸ちゃんの好きな人って誰よ?」

「ああ、理緒だよ」

100%ではないがかなりの高確率でそうだろう。

「そうなんだ。……でもどうやって知ったの？幸ちゃん絶対そんなこと言わないでしょ」

「ちよつとカマかけたら、な」

「へえ、……よかった」

「？なにが？」

「だって理緒も幸ちゃんのが好きなんだよ？」

「え？そうなのか？」

なんと。すでに二人は両想いだったとは。いやはや、びっくりだ。

「あいつら上手くやってるといいな」

「そうだね」

……しかし、何か忘れてるような……

「あ」

「どうしたの？」

「い、いや、なんでもない」

そついや明日幸一に殺されるんだっ！どうすれば……やばい、
どうしていいか分かんねえ。

……ま、いくらあいつでも自分の親友を殺したりしないだろ。……

……多分。

12 限目・・・新登場人物(?) 登場! その2 (後書き)

いや、幸一君が少しいじられてましたな。貴重なシーンです。これからはないかも。フィナの魔法についてはまだ考え中です。……
本当にどうしようかな。

それから感想、評価、良い点、悪い点よかったら書いてってください!!
!! お願いします!!

13 限目・・・人間、自分の弱みを知ってる人には勝てない

―幸一視点―

やばいやばい、遅刻しちまった。いや、昨日ゲームやりすぎたわ。

【ガラツ】

「すみませ〜ん、遅れました〜」

「はい遅刻うううう!!!」

【ブオン!!!】

「よつと」

あの畏大好き先生の声とともに襲ってきた丸太を避ける。

「まだまだああ!!!」

【ヒュンヒュンヒュン!!!】

お？新しい畏か。なるほど、矢での四方八方からの畏か。確かに効果的だ。

けど、まだまだあまいね。

「フィナ」

『ああ』

【ブン!!!】

キーホルダー状態から一瞬で戻ったフィナをひと振りして全ての矢を粉々にした。

ふむ、さすがフィナだな。抜群の切れ味だ。

「よし、終わり。じゃ、戻ってくれ」

『……幸一、その前に少し周りを見てみる』

「周り？」

『……………』

んあ？なんでみんなこっち見て黙りこくってんだ？正樹と玲奈と理緒は「あちゃ〜」みたいな顔してるし。

「おい、笹本……それ、何だ」

それって……フィナのことか？……………あ、

「やべ」

「「「やべじゃないだろ！」でしょ！」「」

正樹と玲奈と理緒のトリプルツッコミが炸裂する。理緒がツッコムとは珍しい。

「ま、いいいべ」

「「「いいのかよー！」「」

今度は正樹と玲奈のダブルツッコミ。うーん、さすがカップルなだけあって、いいコンビだ。

「で？これはどういうことですか？」

現在、俺は校長室にいる。用件はやはりフィナについてだった。当たり前前か。

「っいうか、なんであなたはそんなに態度がでかいんですか!？」

でかい態度とは……今の俺の格好のことをいう。たとえば校長を座らせないために校長の椅子に足を組みながら座るということだ。分かったか？ちびっこ諸君。もしも先生に呼び出されたらやってみよう！多分というか絶対怒られるから。

「え？ダメなの？」

「ダメに決まってます！早くどいてください！」

「ちえ〜」

俺は椅子からどいて校長の机に座った。

「ってそこもダメです!！」

「ちっ!！」

「舌打ちしないでください!！」

まったく、我儘な校長だ。

「ふう、まったく……こほん、では本題に入ります」

「ほ〜い」

「……あなたは何でこんな物を学校に持ってきてるんですか？」

「ダメなの？」

「当たり前です！こんなの学校どころかどこにでも持ってっちゃダメです！」

「へえ〜」

「今知ったように言わないで下さい！」

くつくつく、校長つて意外とイジリがあるじゃないか。

……しかし、このままじゃなんにも話が進まないな。俺が楽しいだけ。……よし、あれを使うか。

「なあ校長」

「なんですか？」

「……こないだのプリ ユアのステージショー、楽しかった？」

校長の顔が引きつる。

「な、なんのことでしょう？」

「おやおや、しらばっくれる気ですか」

「わ、私はもう47歳ですよ？そんなのに興味なんてあるわけが…

……

「へえ〜、じゃ、これ誰だろうねえ？」

校長に向かってとある写真を投げる。

「？……………！！！！？？？？」

その写真を見た瞬間、校長は言葉では表せないような表情になった。ま、そりゃあそうだろうな。なんせその写真にはプリ ユアのコスプレをしている47歳くらいのおばさんが写っていたんだからなあ。

「これが誰なのか……調べればすぐ分かるんだがなあ？」

「い……いやあああああ……!!」

校長は写真をびりびりに破く。ま、当然の反応だな。けど、まだまだあまーい

「それ破つても意味ないよ？だってこっちはまだまだたくさんあるんだから」

その写真を校長に見せる。くっくっく、この様子じゃもう諦めたっぼいな。

「………よ、要求は？」

「もちろん、フィナの持ち込み許可だ。他にもいろいろあるが……まあそれはまた今度ってことで」

「………分かりました」

蚊が遠くで泣いてるような声で言う校長。いや、やりすぎたかな？ま、トドメは刺すけどね。

「あ、そうそう。理事長はちゃんと話しあった結果、許可をちゃんともらえたから」

校長がそれを聞いてこの世の終わりだみたいなお顔をやる。いや、人を精神的にいたぶるのって楽しいね

俺が教室に戻ると、正樹たちが心配そうによってきた。

「おい、大丈夫だったか？」
「没収とかされなかった？」
「まったく、だからあの時言ったのに……」
「だあ、お前ら。いつきに物言っくんじゃねえ。わからんだろが」
「あ、ご、ごめん」
「ああ、あと没収はされなかったぞ。それに許可ももらってきた」
「って聞こえてんじゃん！」

玲奈がツツコム。当たり前だ。俺を誰だと思っでやがる。

「……ちよつと待て。お前今許可もらってきたって言わなかったか？」
「ああ、言っただぞ？」
「……なんの許可だ？」
「もちろん、フィナの持ち込み許可」

それを聞いた三人は顔を青くした。

「……一体どんな方法を使った？」
「ん？それはな……禁則事項だ」
「そ、そうか」

いつもバラバラだったこのクラス。この日、始めて全員（幸一以外）の心が一つになった。

『笹本（幸一）には絶対逆らっではいけない！！』
と。

13 限目・・・人間、自分の弱みを知ってる人には勝てない（後書き）

というわけで13話終了です。

……幸一、鬼畜すぎ。誰だこんな奴を生んだのは。（お前だ。）

しかし……校長哀れすぎ。めっちゃかわいそう。ま、俺がそういう風に書いたんだけどね。

話には全然関係ないけど、新型インフル流行ってますね。俺のクラスでも学級閉鎖になっちゃって……課題が大変だ！

皆さんはどうぞ新型インフルにかからないように気を付けてくださいね。

14限目・・・フィナの能力発表!・・・でも幸一の能力のほづがすごい。(前書き)

今回のサブタイはそのまんまです。読めば分かります。

14 限目……フィナの能力発表! …でも幸一の能力のほうがすごい。

―幸一視点―

現在、日曜の午後12時半。世間一般的に昼飯時である。

そしてこの俺、笹本幸一の昼飯と言ったら……

「カレーだろ!」

『何がだ』

「昼飯が」

『またカレーだと? お前最近カレーばっかじゃないか。というよりカレー以外の食事をしているところを見たことが無い』

「当たり前だ! カレーは世界を救うことができるんだぞ! ? そんなカレーを食わなくてどうする!」

『分かった。私が悪かった。だから落ち着いてくれ』

まったく、本当に分かってんのかね。

ま、いいや。さて、食うとするかね

【パクパクムシャムシャ】

ああ、やっぱりカレーは手作りに限るな。レトルトなんて邪道だぜ。邪道。

『……なあ、幸一』

「にゃんらふいは? ふはんへひほうはっはらほわふほ。(訳: なんだフィナ? つまんねえ用だったら壊すぞ。)」

『うん、とりあえず全部食べてからにしよう。何言ってるのかさっぱり分からん』

「ひよーはあい(訳: りよーかい)」

「んで？なんか用か？」

『ああ、そろそろ私の能力について話そうと思ってな』

「能力？お前に特殊能力なんてあったのかよ？」

『あったのだ。聞きたいか？』

「いや、別に」

『そうか、聞きたいか。なら……ってええっ！？』

「いきなり大声出すんじゃないよ馬鹿。近所迷惑だろが」

怒られんのは俺なんだよ。くそ。

『す、すまん……ってそうではなく！お前、聞きたくないのか？』

「なにを？」

『なにつて私の能力に決まってるじゃないか！』

「別に。どーでもいい」

『ど、どーでもいいって……』

だつてどーでもいいんだから仕方がない。

「で？お前は聞いてほしいのか？」

『だ、誰がそんなこと……』

「じゃ、この話は終わりだな」

『すいません、聞いてほしいです。強がってすいません』

「よろしい。んで？どんな能力だ？さっさと答え」

『ああ、聞いて驚くなよ？実は私を持っていると魔法が使えるようになるのだ！』

「……………へえ〜」

今にもババーンと口で言いそうなフィナに対し、冷静に返してやる。

『……あれ？なんでそんなにリアクションが薄いんだ？』

「だってだいたい予想出来てたし」

剣が持っている特殊能力なんてみんなそんなもんだろ。

『え？だって魔法だぞ？すごいんだぞ？』

「すごくなんてねえよ。それくらい俺だって使えるわ」

『……………え？』

フィナの目が点になる。つっても実際にはそんなもんじゃないからそんな感じだったってことだけだな。

『お前が……なにを使えるって？』

「だから魔法」

『嘘だろ？』

「嘘じゃねえよ。まあ、深い意味で言っちまえば魔法じゃねえけどな。それっぽいのが出来るってことだ」

『信じられん……………』

「ま、そうだろうな。よし、ちょっと待ってるよ？」

俺は台所に行って空き缶を持ってくる。スチール製だ。一応洗ったから汚くはないだろ。

それをテーブルの上に置いて離れる。

「ちゃんと見てろよ？」

フィナにそう言って手に氣をためる。その氣の周りに風が集まってくる。

そろそろいいかな？……よし、いいな。それじゃ狙いを定めて……

「いくぞ！ウインドカッター！」

【キンー！】

スチール缶はかん高い音を出して（ダジャレじゃねえよ？）真つ二つになった。

『……………』

フィナは心底驚いてる様子。そんなに驚くことか？これを教えてくれたじいさんだって出来たぞ？

『お前……今の誰に教わった？』

「ん？お前もよく知ってるじいさんだぞ？」

『なっ！？あの人もできたのか！？』

「ああ。お前が倉庫の中で眠つてるときに教わってた」

『なるほど……どつりであのとき騒がしかったわけだ』

「ちなみに風だけじゃなくて雷や水でもいけるぞ。……でも、なんでか炎だけは無理なんだよな」

『？何故だ？』

「分からん。雷は空気同士の摩擦で出来るし、水は空気中の水蒸気を気で集めるんだ。炎も原理は分かるんだがなぜか出来ん」

もし出来たらガス代いらないんだけどなあ。

『しかし、それは都合がいいな』

「なんでだ？」

『私の使える魔法が炎だからだ』

「それはマジか」
『えらくマジだ』

なるほど、なら使えんな……。

「そんじゃ、いつちよ使ってみますか」

『まてまてまて。何に使うが知らんがそんないきなり使えるようになるか』

「？使えねえの？」

『少しばかり修行すれば使えるようになる』

「修行？どれくらいだ？」

『そうだな……一週間くらいだな。どうだ？短いだろう』

一週間……だと……？

「じゃいいや」

『何で!?!』

「メンドイ」

『それだけ!?!しかもメンドイって一週間だけだぞ!?!』

「一週間もだ。十分長すぎるわ」

『でも、火を自由に使えたら色々便利だぞ!?!』

おお、そうか。ガスのことすっかり忘れてた。ガス代ういたらその分カレー食べんじゃん

「よし、さっさと行くぞ。場所は近くの公園でいいか」
『変わり身早!』

カレーには何者でもかなわんのだ。

公園

「さて、ついたぞ」

『えらく早いな』

「ああ、作者が公園までの描写を入れんのがメンドイそうだ」

『自分勝手な奴だな……』

俺もそう思うがまあ早く着けたしよしとするか。

「さて、どうすりゃいいんだ？」

『うむ、まず私を持つ。それから炎が私の刀身から出るようなイメージをするんだ』

「それだけか？」

『ああ。しかし、言葉で言うほど簡単じゃない。イメージをするときに私と波長を合わさなくてはいけない。それをだいたい……』

フィナがうんちくうんちく五月蠅いので無視する。よし、とりあえずやってみつか。

「よし、行くぞ」

『え？ああ、よしこい！』

「よつと」

【ボオオオオオオオオオオ！！！！】

「おお」

『なっ！！？』

なんだ出るじゃないか。ちょっと勢いがありすぎるけどな。

『そ、そんな馬鹿な……。たった一回やっただけで……。？』

なんかまたフィナがブツブツ言ってるけど、また無視。

よし、もっかいやってみつか。

今度はライターくらいの火で……。

「よし、もっかいいくぞ」

『あ、ああ………』

「ほっ」

【ポッ】

よし、出来た。

『も、もう力の調節ができるだと………！』

またまたブツブツ言ってるけど、またまた無視。
ふむ、これができれやいいかな。

「よし、帰るか」

『えっ！？もう！？』

今までブツブツ言っていたフィナが反論する。

「もっつたって出来たんだしもういいだろうが」

『そ、それはそうなのだが………』

「それに、なんでそんなに俺に修行させたいんだ？」

『そ、それはだなあ………』

「さつさと言いやがね」

『……………楽しいんだ……………』

「は?」

よく聞こえなかった。

『だから!炎をだしてるとストレス発散できて楽しいんだよ!』

「……………」

なんと。放火魔のような答えが返ってきた。さすがの俺もこれにはびっくりだ。

『うう、みんなそんな反応するから言いたくなかったのだ……………』

いや、そりゃそうだろ。

……………しかし、このまんまじゃさすがにかわいそうかな?

「はあ、分かったよ。ほら、いつまでも拗ねてねーで、やるぞ」

『本当か!?!』

「ああ、ホントホント」

『それじゃ、早くやるう!』

……………こいつたまに小さい子供っぽくなるな……………。

『早く〜!』

「あ、ああ。すまん」

ま、かわいいしいか。

14 限目・・・フィナの能力発表!・・・でも幸一の能力のほうがすごい。

(後書き

というわけで14話終了です。

……なんか、フィナのキャラが崩壊してる……こんなはずじゃ……。
ま、いいか。これはこれで面白いからよし!

つてか幸一もう人間じゃないね!それは最初っからだけど、少し離れすぎかな?でも実は……おっと、ここからはネタばれなので言えません。ほとんど言ったようなもんだけどね。

15 限目・・・兄弟（姉妹）喧嘩ほど見苦しいものはない（前書き）

一週間以上更新できなくてすいません！学級閉鎖中の課題やら風邪をひいたりやらで忙しくて出来ませんでした……（涙）それと、来週テストがあるので更新できるか分かりません。本当に、申し訳ありません……。

15 限目・・・兄弟（姉妹）喧嘩ほど見苦しいものはない

―玲奈視点―

「ねえ、正樹。明日買い物付き合ってくんない？」

『別にいいけど、何買うんだ？』

「ん〜、服とか色々だよ」

『げ、もしかして俺は荷物持ちか？』

「当然！か弱い女の子に重いもの持たせるなんてこと、正樹はしないよねえ？」

『はいはい、分かったよ。荷物持ちでも何でもやっつてやるよ』

やった！これで明日は思う存分物が買えるわ！

『……………なあ、ふと思ったんだが』

「なに？」

『それって、デートか？』

ふえ？デートって？……………！！

「ち、ちがつ！これはその……………そういうことじゃ……………／／／／／／／」
『なんだ、違うのか？』

「ち、違くないです……………／／／／／／」

『ならよし！明日が楽しみになったぜ！』

「そ、そう？」

『ああ。じゃ、明日駅前に10時な』

「う、うん」

『それじゃ、おやすみ』

「おやすみ……………」

【がちちゃ】

ど、どうしよう。で、デートの約束しちゃった。そんな気はなかったのに……。

そ、そついえばデートって初めてじゃない！やばい、今からドキドキしてきたわ……。

「なにニヤニヤしてんのよ気持ち悪い」
「えっ!?!」

ほ、ほんとだ。いつの間に……。

「っってお姉ちゃん勝手に人の部屋に入ってこないでよ!」
「いいじゃない、別に。それよりもあんた!」
「な、なによ」
「今の電話、彼氏?」

な、なんかお姉ちゃんから殺気がでてるのは気のせいかな?気のせいだよな?お姉ちゃんだって彼氏いるんだから。だから気のせいよね?

「そ、そうだけど?」
「何話してたのよ?」
「な、なんだっていいじゃない」
「どーせデートの約束でもしてたんでしょ」
「何で分かったの!?!?……あ」

その瞬間、お姉ちゃんの目がキラリと光った。

「うが〜!いちやいちゃしやがって!むかつくわ!」

「痛い！いきなり何すんのよ！」
「うるさい！」

あまりの迫力に何も言えなかった。

「カップルなんてみんな滅ばいいのよ！」
「それお姉ちゃんも入ってるじゃない！」

今度は勇気を出して突っ込んだ。

「あんな奴とつくの昔に別れたわよ！」

なるほど、それで機嫌が悪いのか。ってそれただの八つ当たりじゃん！

「人に八つ当たりしないでよ！」
「うるさいうるさいうるさい！」
「うるさいのはお姉ちゃんだよ！」
「うるつさあ~~~~い!!!!!!」

唐突にあたしたちより格段に五月蠅い声が家に響く。多分別に家にも響いてるんだろうな。

「お、お母さん……」
「あんたらこんな夜遅くに大声なんて出して！近所迷惑でしょ！」

あんたが一番うるさいっていつツッコミがのどにまできたけど何とか抑える。言ったら酷い目に合うし。どうやらそれはお姉ちゃんも同じらしい。顔を見ていると我慢してるのがよく見える。

「まったく、早く寝なさいよ！」
「はい……………」

【ガチャ……………ボタン！】

「……………はあ……………」
「……………悪かったわ、八つ当たりして」

唐突にお姉ちゃんが謝ってきた。

「……………あたしも、ごめん」
「……………」

私たちの間でしばらく沈黙が流れた。

「はあ、なんか疲れたわ。もう寝るわね」

「うん、おやすみ」

「おやすみ。……………あんた明日遅れんじゃないわよ？」

「そんなこと分かってるよ！」

「どうだか」

「もあ……………いいから早く出てって！」

「はいはい。じゃね」

【カチャ……………ボタン】

まったく、お姉ちゃんってばすぐあたしのことからかうんだから。
さて、明日はデートなんだし早く寝なきゃね。

……………ってそうだよ！明日デートじゃない！

はわわ、冷静になったらまた恥ずかしくなってきた……………
……………
……………
……………
……………

今日、寝られるかな……？

15 限目・・・兄弟（姉妹）喧嘩ほど見苦しいものはない（後書き）

15話終わりました。今回は玲奈の話でした。ちなみにこの話は続きません。

べ、別に話が浮かばないってわけじゃないですよ？ただこれはまた今度にしたいなあ〜って……………すいません、嘘です。でも、いつかは書きたいと思ってるのでご了承ください（^―^；）
前書きでも言ったとおり、更新はまた遅れるかもしれませんが、読んでくれると嬉しいです。それでは。

16 限目・・・鈍感同士がくつつくのは非常に難しい(前書き)

16 話更新。…テスト中なのに何やってんだ？俺……。

16 限目・・・鈍感同士がくつつくのは非常に難しい

現在地Ⅱ学校、3階廊下

― 理緒視点 ―

「はあ……」

何で空は青いんだろう。私の心も青く清々しくして欲しいなあ……。

「理緒、あんた一体どうしたのよ？朝から何回もため息ばかりしてるじゃない」

玲奈ちゃんが心配そうに話しかけてくる。

「何でも言っつてよ。出来る限り力になるからさ」

「ホント！？玲奈ちゃん！」

「う、うん！もちろんよ！」

やっぱ、持つべきものは友だね！

「実はね、最近幸一君と話してないなあって」

「……は？それだけ？」

玲奈ちゃんがきょとんとして聞いてくる。その言葉に私は少し怒った。

「……それだけって何よ。私にとっては死活問題なんだよ……？」

「ご、ごめん。謝るから怒らないで？ね？」

「まったく、もう……それでね？どうやったら幸一君と話せるかな

つて」

「その前にさ、あんた13話の時に話してたじゃない。あれはなんなのよ？」

「？だってそれはもう三週間くらい前の話だよ？」

「…そだっけ？」

「そっだよ」

「……お前ら、一体何話してんだ？っていつかそのこと言っちゃダメだろ。作者に怒られんぞ？」

正樹君が突っ込んできた。いつの間に近くまで来たんだろう……。とりあえず、私は質問に答えておく。

「だって、作者さんに言っていていいよって言われたんだよ？」

「何？そっなのか？」

天の声『うん、そっだよ？』

「ずいぶん軽いなあ、オイ。ってかいきなり出てくんなよ」

『気ニシナーイ』

「だからあんたがそれ使うなって！少しは自重しろ！」

「……あんた、誰と話してんの？」

「え？この声聞こえねえの？」

「声？声なんてしないけど…、理緒は？」

「私もしないよ……？」

「俺以外に聞こえねーのかよ……」

『うん。メンドイし』

「とにかく！正樹は邪魔だからどっか行って！」
「な、なんなんだよ、ったく……」

玲奈ちゃんが正樹君を追い返すと正樹君が幸一君のところに行ってしまった。

「で？なんでそんなことで悩んでんの？今まで普通に話してたじゃない」

「そ、そんなこと言ったって、今まではその時話してた話題で話してただけだし……」

「話題なんて関係ないのよ！話そうと思えば何でも話せるでしょ！大切なのは話そうとする意志よ！」

「うう」

「さあ、行くわよ！」

「え？行くって…！ち、ちょっと待って！」

「何よ？」

「ま、まだ心の準備が……」

「レッツゴー」

「おにiiiiiiiiiiii……」

現在地 2年4組教室

「ね、ねえ。やっぱりやめようよ」

「ダメ」

うう、ここから逃げたいよう。

「ねえ、幸一」

「なんだよ？」

「理緒がね、話があるってさ」

「理緒が？何の用だ？」

「え〜っと、あ、ふ、フィナは元気？」

「ああ、元気だぞ？ってかここにいるし」

「「「…え？」「」」

い、今、なんて言った？

「ほら」

『数日ぶりだな』

「…………お、お前ええええ！！本当に持ってきてたのかよ！！」

「ああ。悪いか？」

「悪いに決まってるんだろ！」

「大丈夫だよ。見てのとうりキーホルダー状態なんだから危険は…

…」

あれ？なんか飛んできた…ってええ！？な、何でこんなところで野
球のボールが飛んできてんの！？

しかもあとちょっとで幸一君に当たるし！ この間0・02秒

「「「うい…」」」

【シャン！ズバツ！！…………ぽとっ】

…………え？

「あぶねえなあ。誰だ？こんなところで硬球なんか投げてる奴は」
「ってお前のほうが危ないわあ！！なに室内で剣振り回しちゃって
るわけ！？俺ももう少しで死んでたよ！！??？」

「ん？おお、しまった」

「しまったじゃないでしょ!！」

「いや、つい無意識に」

「無意識で殺されてたまるかあ!！」

正樹君と玲奈ちゃんが必死に突っ込んでる。すごいなあ。私には無理だよ。

「理緒!お前もなんか言っただけだ!」

「え!?!私!?!」

何で私に振るの!?!

玲奈ちゃん、助けてよ。

…あれ?なんか、玲奈ちゃんが考えてる。

「よし。正樹。それ少し待ちなさい。理緒、ちょっと耳貸しなさい」
「え?」

―幸一視点―

「……あいつら、なにやってんだ?」

「…さあ?」

「よし!お待たせ!」

「って早いなオイ」

まったくだ。一体、なにを相談してたんだか……。

「ねえ、幸一君」

「ん?なんだり……なっ!?!」

「学校で剣なんか振り回しちゃだめだよ?」

り、理緒が……また上目使いで……。

「分かった？」

「わ、分かった」

は、反則だろ、そりゃ……。

「れ、玲奈ちゃん。これでいいの…?」

「うん！グツジョブ！」

「なるほどな。これのための耳打ちか」

くっそ〜！玲奈の奴！

「くっくくく、顔を真っ赤にして。一体どうしたのかな？幸一君？」

「うぬぬ、玲奈、キサマ〜〜！」

「こっこまでおいで〜」

「待てこのやろ〜!!」

―理緒視点―（再び）

い、いっっちゃった……。

「さて、そろそろ授業始まるし、席に着こうぜ。あいつらもチャイルムがなったら帰ってくるだろ」

「…ねえ、正樹君」

「なんだ？」

「幸一君の好きな人って、知ってる？」

こんなこと、正樹君に聞くことじゃないってことくらい分かってる。でも、どうしても知りたい。だから、勇気を出して聞いてみた。

「……知ってるよ。でもそれを理緒には教えられない」

「何で!？」

せつかく、勇気を出して聞いたのに!

「これはあいつ自身の口から言わなきゃなんねえことだからな。だから、俺の口からは言えない」

「?どういうこと?」

「分かんねえのかよ!はあ、幸一が鈍感だったのは知ってたけど、まさか理緒もだったとは……」

「え?」

正樹君が何か言ったけど聞こえなかった。

「何でもねえよ。さ、もう授業始まんぞ」

「う、うん」

正樹君、さっきなにいったんだろ?ぼそつと言ってたから分からないよ……。

その後、授業に遅れてきた二人はお説教をつけていた。玲奈ちゃんはちゃんと反省してる様だった。

でも、幸一君はそんな様子は見せずにあくびまでしていた。せめて少しだけでも反省したそぶりを見せようよ……。

16 限目・・・鈍感同士がくつつくのは非常に難しい(後書き)

フィナ「おい！私の出番はあれだけか！？」

作者「え？そうだけど？」

フ「少なすぎだろう！たった一言しか喋ってないじゃないか！」

作「別にいいじゃん」

フ「いいわけあるか！やっと出番がきたと思ったのに！」

作「やっとたつてたつた2話じゃねーか」

フ「それでも久しぶりだろう！お前が更新しなかったんだから」

作「うつせーなあ。忙しかったんだからしよーがねーだろ」

フ「うるさい！次回は私が主役の話を書け！」

作「はいはい、分かったよ(多分)」

フ「多分って何だ多分って！」

作「じゃ、みなさんまた次回に！」

フ「無視するな〜！」

17 限目・・・忍び寄る影(その1)(前書き)

今回からシリアスです。

…でもシリアスになりきれないかも。

17 限目・・・忍び寄る影(その1)

―作者視点―

ふと気付くと、幸一は何もない、真つ暗な空間にいた。しばらく辺りを見回していると、唐突に、どこからか声が聞こえてきた。

『裏切つたな……』

幸一は特に驚く様子もなく、声のした方向を見た。しかし何もない。

『裏切つたな、ハンス……』

その声はだんだんと大きくなる。しかも大量の殺気を含んで。

『裏切り者には死を……』

声の数も増えていく。

『裏切り者には死を!!』

唐突に黒衣の男が大量に現れ、幸一に襲いかかった。

「はっ！」

目が覚めると、そこは見慣れた自分の部屋だった。

『どうした幸一？汗びっしょりじゃないか』

フィナが心配そうに話しかけてきた。

幸一は「何でもねえよ」と軽く受け流して、洗面所に向かった。

「ふう……」

汗だらけの顔を洗い、一息つき、しばらく何も無い空間を眺めていた。

「久しぶりだな。あの夢見るのも……」

幸一は呟くようにそう言った

。

―幸一視点―

『どうしたのだ？今日は元気がないじゃないか』

『そんなことはないぞ？俺はいつでも元気百倍だ』

『そんなセリフは愛と勇気だけが友達のアんパン男になってから言え』

やけに冷静に突っ込まれた。面白くない……。

「何朝つばらから剣と漫才やってんだ？」

後ろから話しかけられたので振り向くそしてそこには……、

「周りのことなど一切考えず、自分たちのバカップルぶりを世間に露呈しまくる奴らの片割れの正樹がいた」

「って心の声だだ漏れだから！」

「オウ、しまった。俺としたことが。H A H A H A H A H A」

「わざとだ…絶対わざとだ……………！」

怒りに震える正樹。うん、やっぱり人をいじるのって楽しいわ
そして俺はある不審な点に気づいた。それは

「玲奈はいないのか？」

そう、玲奈がいないのだ。いつも必ずべったりと登校してきている
はずなのに今日は正樹一人だった。

「ああ、実はあいつ日直ですよ。先に行つちまったみたいなんだ」

「珍しいな。一緒に行こうとは思わなかったのか？」

「思ったけど、それ知ったときには玲奈、もう学校だったんだよな。
理由を聞いたなら「正樹に迷惑をかけたくなかった……………」だってさ」

……………こいつ…いつか殺す……………。

「で？お前は どうしてこんなに早いんだよ？」

「別に。なんとなくだ」

「そうかい。じゃ、俺、急ぐから。また後でな！」

「はいはい、分かったからはや……………」

「どうした？」

「……………いや、何でもない」

…おかしいな。今確かに殺気を感じたんだが……………気のせいかな？

― 作者視点 ―

幸一たちのいるところから約10

k m位の地点に、全身黒づくめの服を着た、男の子がいた。年は15歳くらいで、まだ、年相応なあどけない顔をしていた。その少年は一瞬ニヤリと笑ったかと思うと、消えた。

17 限目・・・忍び寄る影(その1)(後書き)

シリアス編のプロローグみたいなものです。なのでめっちゃ短いです。

うーん、俺シリアスなんて書いたことないからなあ。不満だったらすいません。

18 限目・・・忍び寄る影(その2) (前書き)

今回死ぬほど短いです。

18 限目・・・忍び寄る影(その2)

―幸一視点―

「なぐんか、降り出しそうだな……」

なんとなく、教室から空を見て呟いてみた。

「おいおい、マジかよ！俺、傘持ってきてねえよ……」

すると、その呟きにわざわざ反応する正樹。

「え〜？さては正樹、天気予報見てないな？し、しょうがないからあたしの傘に入れてやってもいいわよ？」

「ホントか？よかった〜、ありがとな！」

「そ、そんなお礼を言われるようなことじゃないよ……」

まあ、勝手に二人の世界に入るバカップルは置いといてと、

「そーいや俺も傘持ってきてねーや」

「そうなの？」

バカップル二人組は自分たちの世界に入ってるため、珍しく理緒が返事してきた。

「ああ、今朝嫌な夢見て、それについて考えてたら天気予報見るの忘れてた」

まあいつもよりかなり早く出たってのもあるんだろうけど。

「へく、どんな夢だったの？」
「……………」

とりあえず無言で返事。……あれは言えないからな。

「あ、ごめん。答えたくないならいいよ」
「すまん」

分かってくれたか。空気読める奴で助かった。

「ああ、なんとなく朝いつもと違うなと思ったたらそれが」

……………空気読めねー奴発見。排除するか。

「正樹」
「なんだこつ…がふつ!？」

正樹を呼んで鳩尾に拳を叩きこむ。ふく、すつきり

「ちよ、あんた！なに「黙れ」はい、すみませんでした」

「たくこのバカップルは、黙らせんのも一苦労だなおい。」

「ね、ねえ幸一くん」
「ん？なんだ？」

「傘無いんならわ、私の傘使う？」
「お前傘二つ持ってたんの？」

「ひ、一つだけど……………」
「だったらお前が使えるよ。女の子を濡らして帰るなんてそこまで腐
つちやいねえぞ」

18限目・・・忍び寄る影(その2)(後書き)

18話終了です。

1週間以上空いてた割に今回めちゃくちゃ短い！この作品で一番短いな、絶対……。

今回は多分やつとシリアスっぽくなると思います。……多分。

この作品について感想、評価、文句、等々良かったら送ってください！待ってます！送ってくれたら作者が死ぬほど喜びます！

19 限目・・・忍び寄る影(その3) (前書き)

更新、遅れてすみませんでしたあああああ!!

宿題、部活、用事、アイデアが浮かばない等々の理由でなかなか更新出来ずにいました。

話は変わりましたが今回はシリアスです。なりきれてない感じかもしれませんが、そこは気ニシナイで!

19 限目・・・忍び寄る影(その3)

―作者視線―

「だからなくんで俺んちに向かうかなあ？」

「いいじゃねーか、近いし。雨やどり位させろよ」

現在、幸一のアパートの近く。帰宅途中に雨に降られてしまい、走って幸一の家に向かっている途中だった。

「ほら、喋ってないで走って！もっと濡れるじゃない！」

「もう全身濡れてるから意味ねえだろ」

「幸一、そこは気にしたら負けよ」

「どんな理屈だ」

ちなみに理緒の傘は誰かに盗まれており、玲奈は傘はあったのだが、壊れていて傘が開かなかった。なんというか間抜けな話だ。

「はあ…はあ…も、もう、限界……」

「理緒！あと少しだから頑張れ！」

「ったく、もう少し位もたせろ……！？」

文句を言おうとした瞬間、幸一はものすごい嫌な感じに襲われた。

「おい！幸一！止まってないで走れよ！」

正樹が文句を言うも、幸一は聞く耳を持たず、当たりを見回していた。ひどく、焦った様子で。

「幸一！早くしてよ！」

「……幸一君？」

理緒が幸一に声をかけて瞬間、4人に上空から接近する何かに気付いた幸一は叫んだ。

「みんな！避けるっ！」

叫ぶと同時にフィナを剣の状態に戻し、上に向かって斬りつける。しかし、何かを斬った感触はなく、フィナは空を斬っただけだった。

「……ひどいなあ、いきなり斬りかかってくるなんて」

その声は、幸一の後ろから聞こえた。振り向くと、全身黒ずくめの格好……あの、幸一たちを観察していたあの少年がいた。しかも、その手には気絶した理緒が抱えられていた。

「なっ、り、理緒！」

「大丈夫だよ、気絶しているだけ。ま、あなたの行動次第で危険になったりするかもだけど」

「ふざける！理緒を離せ、エフレム！」

「やくだよ。この子は大事な人質なんだから。兄さん、あんたを殺すためのね」

幸一がエフレムと呼ぶ少年は、幸一を指差しながら言った。

「に、兄さんって……幸一!？」

「ありや、知らなかったの？兄さん話さなかったんだ」

「うるせえ！テメエには関係ねえだろ！さつさと理緒を離して魔界に帰りやがれ！」

「だからダメだって。それに、魔界に帰るのもあんたを殺してからだよ。ま、正直なところ人質なんかいなくても今のあんたなら余裕で殺せるけどね」

「ほお……？じゃあやってみるや」

「今さら余裕ぶつたってダメだよ。それに、人質がいたほうが兄さんも燃えるでしょ？」

「黙れ。やるならさつさとかがって来い」

今の幸一の言葉は今までとは違い、声に完全な殺気が含まれていた。

「あらら、完全にキレちゃった。ま、いいや。今戦おうなんて思っ
てないよ。今日はちよつとしたあいさつみたいなものだからね」

「ごたごた五月蠅いんだよ。かかってこないならこつち……」

「それはやめといたほうがいい。兄さんだって、この人を傷つけたくないでしょ?」

「ぐっ……」

「それじゃ、僕は行くよ。そうそう、戦うときはなにかしら合図をするから。聞き逃さないでよ?」

そう言い残し、エフレムは黒い光に包みこまれ、消えた。

「おい! 待て! ……くそっ! くそおおおおお!!!」

降っていた雨はさらに激しさを増し、茫然としている二人と、いつまでも地面を殴り続ける幸一を、強く、打ちつけていった。

19 限目・・・忍び寄る影(その3) (後書き)

ということでした。いやー、シリアスって難しいなあ……

(^| ^ ;)

誰か上手くシリアスを書く方法を知ってたら教えてくれませんか？
自分でかんがえろ)

作者は基本授業中に考える悪い子なんですけど、最近席替えて前のほうになって書くのが難しくなりました。でもまあ頑張ってみつからないようにしたいです！

20 限目・・・幸一の過去(その1)

―正樹視点―

「で、どういうことなんだ？」

俺は思い切って幸一に聞いてみた。あのエフレムって奴と幸一は兄弟らしい。絶対なにかある。

「……………」

「……………だんまり？ 私たちに話せないってこと？」

玲奈がしびれを切らし、口を開いた。その言葉にははっきりと棘がある言い方だった。

「そうよね？ だってそんな大事なことを話せないくらい信用ないもんね私ら」

「おい、玲奈！ それは言い過ぎ……………」

「どこがよ！ だって言ってくれなかったじゃない！ それって私たちの信用がないってことじゃないの!？」

玲奈のあまりの剣幕に思わず口が閉じてしまった。確かに、玲奈の言うことにも一理ある。あるが、幸一の気持ちも少しは察して欲しかった。目の前で好きな人が攫われたんだ。その気持ちは、想像を絶するだろう。

「違う、そんなんじゃない」

幸一が、やっと口を開いた。ただ、その顔は暗く、いつもの余裕そうな感じは全くなかった。

「なにがそんなんじゃないの!? 言ってみなさいよ!」

なおも、玲奈はものすごい剣幕で幸一に迫る。

「……出来ることなら一生話したくなかった。思い出したくなかった。でも……もう駄目だな」

幸一は覚悟した顔で、俺たちにといいより、一人言のように呟いた。玲奈も、そんな幸一を見て落ち着いたようだった。そりゃそうだろうな。……こんな幸一、見たことない。

「分かった、俺の過去を全部話す。ただし、今から話すことは全部本当のことだ。信じてくれ」

「……分かった」

「……うん」

俺らの了解の言葉を受け取り、幸一は一呼吸置いて語り始めた。

20 限目・・・幸一の過去（その1）（後書き）

20話終了です。今回は笑える場所が一つもない！こんな初めてだ……。

まあシリアスなんだから当然っちゃ当然なんだけど。

今回めっちゃめっちゃ短いのはサブタイトルの幸一の過去のプロローグみたいなものだからです。まああんまり期待しないでください。

ではでは〜。

21 限目・・・幸一の過去(その2) (前書き)

お、遅くなりました……。何回も書き直ししてたらこんなに遅くな
った……。

21 限目・・・幸一の過去(その2)

―作者視点―

そこは荒れ果てていた。緑はなく、水は枯れ、空は暗い。

そんな場所で人々は争っていた。わずかな水と食料を求め、殺しあっていた。

それを5歳くらいの少年は丘の上から悲しそうに見ていた。

「ハンス」

その隣にいた大柄な男が少年の名前を呼んだ。その声は太く、威厳のあるものだった。

「……認めたくないが、これがこの国……いや、この世界の現状だ」

男は悲しそうに言った。ハンスは目をそらしながら聞いていた。

「……この国の王として、これほど悲しいものはない」

「……………」

ハンスは何も言わなかった。王は構わず続けた。

「出来るなら自分のこの手でこの世界を救いたい。……だが、王となった今の私ではなにも出来ない」

王は辛そうに顔を伏せる。ハンスは王の気持ちがあっていた。分

かっていたからこの全てから逃げ出したい衝動を懸命に抑えていた。

「だから、この世界を救えるのはお前だけなんだ、ハンス……」

王はまだ低いハンスの目線に合うよう、かがんで言った。その真剣な眼差しの中に、何も出来ない自分自身への怒りと、こんな小さな子供に全てを任せるといふ不甲斐なさを後悔が見てとれた。

ハンスはその眼を見て、そして今まで決めかねていたことを決意した。

「……分かりました。地球へ……行けばいいんですね」

「……ハンス、すまないっ……」

「……お父様……」

王はついに泣き崩れた。限界だった。自らの息子をどんな世界かも分からない、もしかしたらこの世界より危険かもしれない地に送らなければならぬ悲しみは相当なものだったのだろう。

そんな自分の父の姿を見て、ハンスも泣いた。

ハンスもまた、限界だった。5歳でありながら、自分がこれからしなくてはいけないことの重大さを理解していた。だからこそ、5歳というまだ未熟な精神ではそのプレッシャーに耐えられなかった。

……ハンスがこれから行い、この世界の人々を救う方法、それは

地球に存在する人間を滅ぼし、この世界の人々を移民させること、だった。

そもそも、なぜこんな世界になったのか。もともと、この世界、魔界は緑豊かな世界と言っわけではなかった。それでも、人々の表情は明るく、日々を懸命に生きていた。

……しかしある日、空から突然隕石が降ってきた。その大きさは、魔界の十分の一もの大きさで、まだこの世界が存在していることは奇跡だった。

だが、この隕石は魔界に存在する全ての生き物に影響を与えた。少なからず存在していた緑は完全になくなり、今まで青かった空も粉塵により完全に黒くなり、水は枯れ、動物たちも死滅していった。

もちろん、人間たちにも影響があった。人々の顔から笑顔はなくなり、毎日のように争いの絶えない世界になってしまったのだった。

「では、行ってきます」

「……気をつけるのよ」

次の日、早くもハンスは地球へ行くことになった。行くならば早く地球をこっちのものにしたほうがいいと、議会で決まり、今日になった。

なぜ、ハンスだけが行くというのは、地球へと行ける道は、代々、王子にしか使えないものだからだった。他の者も行くとなると大量に魔力を消費してしまい、もしかしたらハンスが死んでしまうと可能性もあった。だから、ハンスの弟である、ランスがこの術を使えるようになるまで、ハンスが人間を滅ぼす、ということが議会で決まったからだった。

ランスがこの術が使えるようになれば、魔界と地球から同時に使い、大量の人が移動できるようになるということを知り、議会はこんな方法を提案し、決定したのだった。

もちろん、王と、王妃は反対したが、議会は王の権力より強く、功をなさなかった。

結果、ハンスが単身地球へと攻め込むことになってしまったのだった。

「……頑張るんだぞ」

「……はい」

正直、行きたくなかった。自分の親と、しばらくとは言え、離れるのも嫌だったが、そもそもこの方法自体も嫌だった。

この方法をとらねばこの世界がいずれ滅ぶことは確かだったが、他の世界で平和に暮らしている者たちを皆殺しにする、ということに納得をしていなかった。
が、所詮5歳の子供であるハンスの意見が通るとは到底思えなかった。

「無事に……帰ってきてね」

そういう母の手の中には今年4歳になるランスがすやすやと眠っていた。

ハンスはランスが羨ましかった。自分が弟だったらいいのに……と思ったりもした。

しかし、そんなことを考えても仕方ないので、考えることをやめ、目の前の空間に穴を開ける。

「……行ってきます」

最後に両親にそう言い残し、ハンスは穴の中に入った。そしてその数秒後、穴は消えた。

「……うっ、……うっ、なんで、……な、なんであの子が……」

「………仕方ないさ、無事に帰ることを祈ろう」

そして両親はその場にその場に膝を着き、すでにこの荒れた世界から逃げたであろう神に祈りを捧げた……。

21 限目・・・幸一の過去(その2) (後書き)

21話です。サブタイ、変更しようかな……。
幸一君の過去まだまだ続きます。

22 限目・・・幸一の過去(その3) (前書き)

今回、やっとコメディ要素を入れられました。長かったよ。
あと、ハンス視点短いけど、気ニシナーイ

22 限目・・・幸一の過去(その3)

―ハンス視点―

「着い……たの……？」

まず、見えたのは透き通るような青い空だった。こんな空、見たことない……。

それに、あちには緑色の山が見える……すごいな……。

……はっ！ 呆けてる場合じゃないよ。早く目的を果たさないと。

さて、どこ行こう？ 周りには家っぽいのがたくさんあるけど……。

……なんとなく体が重い。まずは休めるところを探そう……。

「あ、危ない！」

「えっ……？」

声がしたほうを見ると、美人なお姉さんがこっちに駆け寄ってきた。

【キキイイイイ！】

今度は耳障りな音がすぐ近くでなった。そっちを見ると、でかい鉄の塊が僕に迫ってきていた。

「ま、間に合わない……！」

こ、これ、まずいよ！ 魔法で吹き飛ばさなきゃ……。
そう思いながら手に魔力を集める。でも……

「……あれ……？」

集めようとした魔力はこれっぽっちも集まらなかった。

「なんで……？父さん、母さ

【ドクッ！…！】

……それが、「僕」の最期の言葉だった……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

―作者視点―

「……ん………う、ううは……？」

ある病院の一室で少年は目を覚ました。4〜5歳くらいの小さい子供で、この世界の服とは少し風変りな物を身にまもっていた。

「あ、良かった！目が覚めたのね！」

「え、えっと……お姉さん、誰？」

「ああ、ごめんごめん。私はなまもとみのじ笹本実里。……ごめんね。助けてあげられなくて」

「助けてって……？」

「憶えてないの？あなた車と事故に遭ったのよ？」

「車……？ 事故……？」

少年は聞きなれない言葉に頭をかしげた。しかし、実里はそれには気付かなかったのか、そのまま続けた。

「とにかく、あなたのお母さんに連絡しなくちゃね。あなた名前は？ 電話番号とか言える？」

「電話番号……？ 名前……？ ……分かんない」

「そっか……」

「……なにも分かんない……」

「え？」

「何も分かんない……何も思い出せないよ……」

「え……？ち、ちょっと待ってて！」

実里は慌ててナースコールを鳴らし、医者を呼んだ。

「どこかしましたか！？」

医者はすぐに少年の病室にきて、実里に事情を聞いた。

「記憶……喪失、ですか？」

「はい……どうもそうらしいんです。何も思い出せないって……」

医者は、しばらく何かを考え、少年に詰め寄った。

「君、ホントに何も思い出せないのか？」

「は、はい」

少年は医者が怖かったのか、実里に抱きつきながら答えた。実里は内心少年のかわいさに抱きつきそうだったが、事情が事情なのでさすがに抑えた。

「何もかい？」

「はい、何も……」

(でも……なにかしなくちゃいけないことがある気がするんだけど……なんだろう?)

「困ったなあ……身元が分からないんじゃない施設に送るしか……」

「私が引き取ります」

「は？」

「私がお子を引き取ります」

「し、しかし……」

医者は困惑した様子で実里を止めようとした。

「いいじゃないですか。身元が分からない以上、施設に送るしかない

いんですよね？ だったら私が引き取っても同じです」

しかし、実里は確固とした意志で引かなかった。

「……はあ、分かりました。幸いにもその子はあなたに懐いてるようですよ。大丈夫でしょう」

医者もそれが分かったのか、ため息まじりで承諾した。

「ありがとうございます」

「ですが分かってますね？ 万が一、その子を探している人を見つけた場合、帰してあげてください。それと、その子をちゃんと愛してあげてください。……半端な覚悟じゃ出来ませんよ？」

「分かってます！」

「そうですか……ではよろしくお願いします」

「はい！」

「……？」

少年は今の話が理解できなかったのか、顔に？マークを浮かべ、実里の服をツンツンと引っ張った。

実里は少年が理解していないことを悟り、説明した。

「……ということなの。私たちは、家族になるのよ」

「か……ぞく……」

「嫌？」

少年は顔を横に振り、にぱっと笑った。

「そう、よかった」

実里も、安堵した笑顔を浮かべ少年に抱きついた。

「これからよろしくね……あ、名前が分からないだった」

「名前……」

「そうよ、いつまでも名前が無いなんて嫌でしょ？」

少年は顔を縦に振った。

「じゃあ、なんて言うのがいいかな？うーん……」

「太郎はどうですか？」

医者が意見をだす。が……

「ありきたり！ 却下！」

速攻で却下された。医者は部屋の隅で丸くなり、「私の名前なのに……」と呟いたが、2人の耳には届かなかった。

「よし！ 決めた！」

「……………どんなの？」

少年はドキドキしながら聞いてみた。

「一つだけでも幸運を掴むで幸一はどっ？」

「不吉な……………」

「何か言いました？」

「いえ、別に……………」

2人がそんな馬鹿らしいやり取りをしているあいだ、「幸一……………幸一……………」と何回か呟き、満面の笑みを浮かべながら言った。

「僕、その名前がいい！」

「そうですね！？ それじゃあなたの名前は今から笹本幸一よ！  
よろしくね、幸一」

「うん！」

少年改め幸一と実里が笑っている中、医者であり、ありきたりな名前の持ち主である太郎は、

「絶対太郎のほうがいいのに……………」

まだ諦めきれていなかった。

22 限目・・・幸一の過去(その3) (後書き)

お、遅くなってしまった……。部活とか色々忙しくて……。すいません……。

今回、久しぶりにコメディ要素を入れてみましたがどうですか？  
あんまり面白くないでしょう？……精進あるのみです。頑張ります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4628i/>

---

松陽学園生徒の日常

2010年10月8日22時59分発行